櫛形町文化財調査報告　No－13

柿平B遺跡

――― 櫛形町柿平土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書 ―――

附　町内遺跡試掘調査報告

1995

櫛形町教育委員会

序　　文

櫛形町は、峡西地方の中央に位置し、櫛形山の山麓に発達した町であります。２万年以上まえから人々の生活が始まり、以来長い歴史の中で常に峡西地方の中心として栄えてきました。

本町の中心「小笠原」は平安時代から鎌倉時代にかけて小笠原氏の氏祖《小笠原長清公》が館を構えたところといわれています。

今回櫛形町では、町の総合的な都市計画の中で、地域の整備と健全な市街地の造成と供給をおこなう事を目的として、本町の中心市街地に隣接する小笠原字柿平を中心とする地域27.6*ha*について、「峡西都市計画事業　櫛形町柿平土地区画整理事業」を計画しました。

櫛形町教育委員会では平成４年度に事業予定地内における遺跡の所在・規模等を確認するための調査を実施したところ、３ヶ所で遺構を確認したため事業実施に先だって埋蔵文化財の保護をはかるために、今回国・県の補助を頂き、発掘調査を実施しました。

幸い、今回の調査において多くの重要な事柄が発見され、さらに従来の知見に付け加えるべき新たな事実も確認することができましたことは、本書に述べる通りです。

この調査の結果が、地域を知り、地域の歴史を次代に伝えていく意義ある資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査、ならびに報告書作成において種々ご指導、ご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

平成７年３月

櫛形町教育委員会

教育長　沢　登　孝　弘

例　　言

1．本書は、平成６年度文化財保存事業補助金をうけて実施した櫛形町柿平土地区画整理事業地内遺跡発掘調査及び、町内遺跡試掘調査の報告書である。

2．遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町字柿平他に所在する。

3．調査を実施した年月日は以下の通りである。

柿平土地区画整理事業地内遺跡

現地調査　　平成６年４月20日～同年６月７日

11月７日～　同月10日

整理作業　　平成６年12月～平成７年３月31日

それら以外の調査については、文中に明記してある。

4．調査組織は以下の通りである。

調査主体　　櫛形町教育委員会

調査担当　　清水　博（櫛形町教育委員会）

調査事務　　櫛形町教育委員会

5．発掘作業参加者

相川はるみ　相川みさえ　饗場うさ乃　甘利千恵子　石川　千年　川崎しげみ　神田久美子

桜田　和子　桜田　定子　桜田みさえ　桜田みさ子　長沼　豊子　中島　由美　深沢真由美

古郡フミ子　由比　伴三　アレックス・イエム

6．整理作業参加者　若林　初美

7．本報告書作成の業務分担は下記の通りである。

第Ⅰ～附章 ― 清水、遺物の実測・トレース ― 若林

8．本書作成にあたり下記の方々から、ご指導・ご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

小野　正文・保坂　康夫（山梨県教育庁学術文化課）、

田代　　孝・新津　　健・出月　洋文・中山　誠二（山梨県立埋蔵文化財センター）

山路恭之助（須玉町教育委員会）

発掘調査にあたって、櫛形町柿平土地区画整理組合をはじめとして各事業主体者の方々に物心ともに様々なご協力をいただいた。あわせて謝意を表する次第である。

9．発掘調査によって得られた出土遺物、記録図版及び写真等は櫛形町教育委員会において保管している。

凡　　例

1　遺構実測図の水糸レベルは海抜高を示す。

1　遺構図及び遺物出土位置図等現場において作成した図面はすべて国家座標第Ⅷ系によっている。

1　スクリーン・トーンは版築面を示す。

目　　次

序　　文

例　言（凡　例）

第Ⅰ章　調査の目的と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と目的 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡を巡る環境 …… 2
　第１節　自然環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物 …… 6
　第１節　発見された遺構 …… 6
　第２節　出土した遺物 …… 11

第Ⅳ章　調査の成果と課題 …… 12

附　章　これまでの町内遺跡調査の成果 …… 13
　第１節　伝嗣院原遺跡の調査 …… 13
　第２節　小笠原警察署野之瀬警察官駐在所
　　建設用地内（清水Ｃ遺跡）試掘調査 …… 14
　第３節　山際住宅団地造成地内（善徳院遺跡隣接地）試掘調査 …… 15
　第４節　善徳院横遺跡隣接地における宅地造成に伴う試掘調査 …… 15
　第５節　切付遺跡の調査 …… 17
　第６節　パチンコ出店（ジャンボ）に伴う大新井Ｃ遺跡等の試掘調査 …… 19
　第７節　ケーヨーホームセンター建設用地内遺跡確認調査 …… 19
　第８節　農道４号支線２号線開設に伴う試掘調査 …… 22
　第９節　ヤオハン建設用地内（往還東Ａ・Ｂ遺跡）試掘調査 …… 23
　第10節　宝珠寺収蔵庫建設用地（宝珠寺遺跡）の発掘調査 …… 26

引用・参考文献 …… 28

報告書抄録 …… 28

挿図目次

第１図　櫛形町柿平地区土地区画整理事業総合現況図及び発掘区位置図〔１／6000〕…… 1
第２図　遺跡周辺地形図〔１／15000〕…… 3
第３図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔１／25000〕…… 5
第４図　柿平Ｂ遺跡全体図〔１／400〕…… 7
第５図　１～８号溝状遺構・９号溝(1)〔１／240・１／60〕…… 8
第６図　１～８号溝状遺構・９号溝(2)〔１／60〕…… 9
第７図　１・２号土壙、基本土層図（南壁）〔１／60・１／300〕…… 10
第８図　出土遺物〔１／３〕…… 11
第９図　伝嗣院原遺跡周辺地形図及び発掘区全体図〔１／5000・１／1000〕…… 13
第10図　清水Ｃ遺跡周辺地形図及びグリッド配置図〔１／5000・１／1000〕…… 16
第11図　山際住宅団地造成地内試掘グリッド配置図及び同土層概念図〔１／2400・１／60〕…… 16
第12図　切付遺跡周辺地形図〔１／5000〕…… 17
第13図　切付遺跡遺構全体図、同セクション図〔１／600・１／300・１／120〕…… 18
第14図　大新井Ｃ遺跡及びケーヨーホームセンター建設用地内トレンチ配置図 ……
及び土層概念図〔１／1500・１／60〕…… 20
第15図　大新井Ｃ遺跡、往還東Ａ・Ｂ遺跡周辺地形図〔１／6000〕…… 21
第16図　農道４号支線２号線内グリッド配置図〔１／5500〕…… 22
第17図　ヤオハン建設用地グリッド配置図、同土層概念図〔１／3000・１／60〕…… 24
第18図　宝珠寺周辺地形図〔１／5000〕…… 26
第19図　宝珠寺発掘調査全体図、及びセクション図〔１／360・１／120〕…… 27

写真図版目次

図版１　(1)　柿平地区土地区画整理事業全景
(2)　柿平Ｂ遺跡遠景
(3)　柿平Ｂ遺跡全景
図版２　(1)　１号溝状遺構
(2)　１号溝状遺構セクション
(3)　１号溝状遺構セクション
図版３　(1)　１～８号溝状遺構西端部
(2)　１号土壙
図版４　(1)　２号土壙
(2)　９号溝
(3)　試掘トレンチ土層断面
(4)　試掘トレンチ土層断面

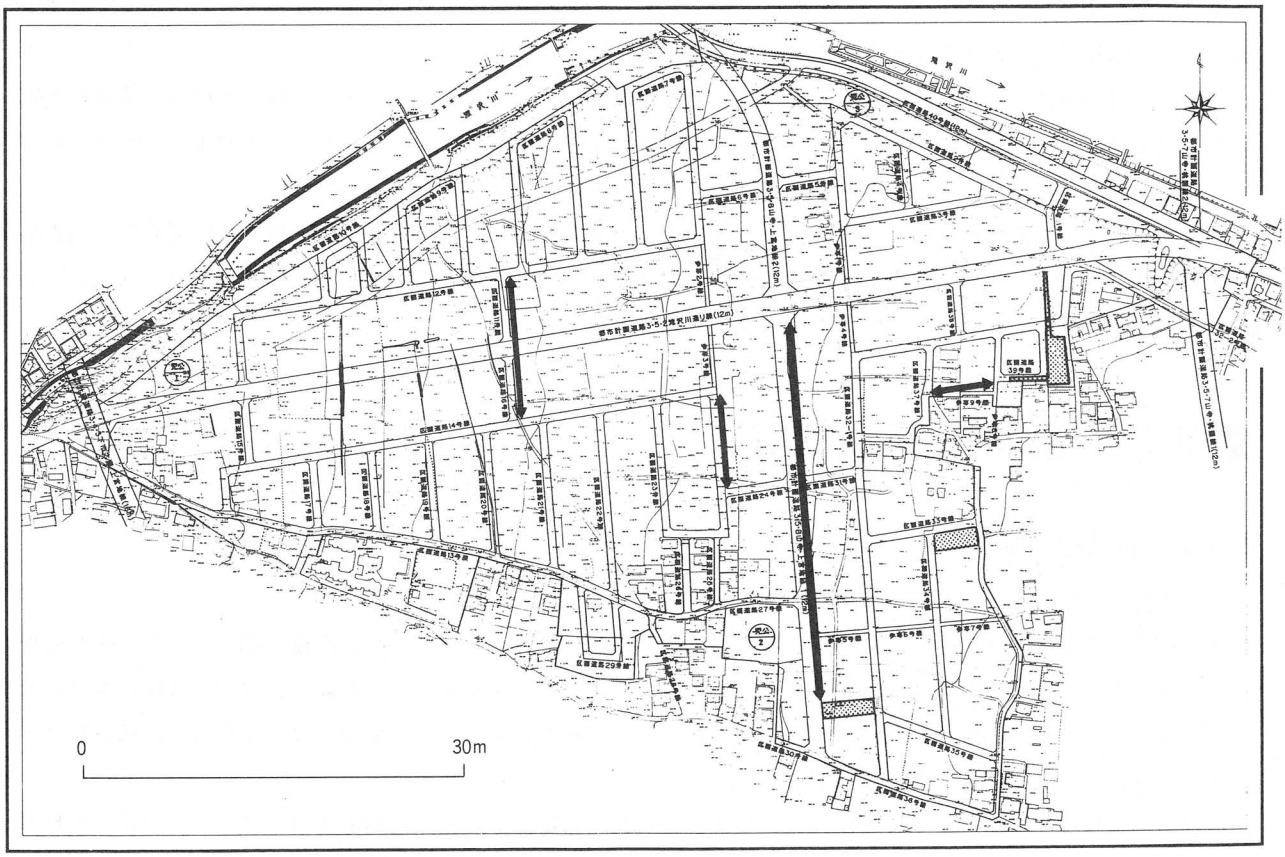
第Ⅰ章　調査の目的と方法

第１節　調査に至る経緯と目的

櫛形町では、本町の中心市街地に隣接する小笠原字柿平を中心とする地域（第１図）について、本来あるべき機能を有する居住空間を創設するために、都市計画との整合を図りつつ、健全な市街地の造成と供給を行う事を目的として土地区画整理事業を計画した。同事業は名称を「峡西都市計画事業　櫛形町柿平地区区画整理事業」とし、平成４年６月13日に設立された『櫛形町柿平土地区画整理組合』を事業施工者として、平成11年春の完成をめざして行われる事となった。その対象面積は 27.6 *ha* におよび、櫛形町小笠原字柿平（一部）、同字一ノ出しの一部、大字上宮地牧野の一部及び大字桃園字西原の一部を含むものである。

ところで、同事業予定地内には６ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認[*1]されており、その一部ではかつて試掘調査が実施され若干の土器片が出土[*2]している。また事業予定地東には「小笠原長清館跡」に比定[*3]されている小笠原小学校が存在し、その一部は試掘調査[*4]が行われている。そのため、櫛形町と櫛形町教育委員会では、区画整理事業に先だって国・県の平成４年度文化財保存事業費補助金をえて事業地内における遺跡の所在・規模等を確認するための調査を実施した。[*5]

試掘調査の結果、３ヶ所において、遺構あるいは遺構らしきものを確認する事ができた。それらは事業区のほぼ東辺あるいは南辺に集中し、従来から埋蔵文化財包蔵地として確認されていた地点であった。
特に事業区東端部に近いＭ区は柿平Ｂ遺跡とほぼ重複し、良好な遺物が出土していた。出土した遺物は主に中世から近世にかけてのものが主であった。そのため、先述した事業予定地東に隣接していたとされる小笠原氏館跡に関連する遺構が確認されるとの期待ももたれた。そこで、町教育委員会では、遺跡保存について柿平土地区画整理組合と協議に入り、試掘調査時に遺構・遺物を確認した３ヶ所について事業開始前に記録のための調査を実施する事、調査費用については基本的に柿平土地区画整理組合が負担し、一部については国・県の補助を得なが



第１図　櫛形町柿平地区土地区画整理事業現況図及び発掘区位置図〔１／6000〕

ら町教育委員会において負担することとした。また試掘調査では、地表下1.5～2m程掘削したのみであったため事業に伴う深部掘削にあわせ、事業地内数ヶ所において基本土層の観察等を行うとともに遺構・遺物の存在を再確認することにも協力を得ることで合意した。

本区画整理事業は、平成5年11月27日にその第1期道路築造工事起工式を行い、都市計画道路・区画道路・上水道工事等を開始した。町教育委員会では平成6年3月に上水道工事に伴う一部立会を行ったが、本格的な発掘調査は年度をあらためて平成6年4月20日に開始した。調査は同年6月7日に完了したが、その間も調査にあわせて事業地内数ヶ所において、掘削立会、基本土層の観察等諸情報を収集した。

第2節　調査の方法と経過

調査は、平成6年4月20日に開始した。基本的には、試掘調査時に遺構あるいは遺構らしきものを確認した3ヶ所について調査を行った。区画整理事業地東北部（試掘調査時M区）を1区、同東辺（試掘時Ⅰ区）を2区、同東南部（試掘時K区）を3区と呼称した。試掘時に溝状の遺構を検出した1区については、試掘時に遺構を確認したグリットを中心に1600㎡を調査した。2・3区では試掘時に遺構を確認したグリットを中心に、幅3～4mのグリットを設定し、2区では20m、3区では30mに及んだ。総調査面積はほぼ1800㎡に達した。また、本事業に伴い上水道の本管を埋設するため地表下5m程まで掘削した箇所については、工事事業者のご協力を頂き、遺物の確認、基本土層の観察（写真撮影）等を実施した。

1区では35×40mの範囲を発掘区として設定した。さらに遺構が北・西方向へ延長するか否かを確認するため幅4m弱のトレンチを北へ50m、西へ17mほど設定した。区画整理事業工事用に設定していた基準軸を利用して国家座標第Ⅷ系を用い10m方眼のグリットを設定した。遺物の取上げ、遺構の図化にはコンピューター・システム株式会社製のプログラム「ＳＩＴＥ」を使用し、光波測量器、コンピューターを利用し迅速かつ正確を図った。

3区では試掘時に溝を確認した2個のグリッドを結ぶ様に東西方向に幅4m、長さ30mのトレンチを設定し約120㎡にわたって遺構の検出に努めた。当初、試掘時の確認面である耕作土直下で精査を行ったが遺構・遺物の発見には至らなかった。そのため、すぐ西に近接して掘られていた工事用の掘削面（地表下2.5m）まで再度重機によって掘り下げ、精査を実施したが数点の土器を発見したに止まった。

2区は諸般の事情により、1・3区と同時期に発掘調査を実施することができず、平成6年11月に調査を実施した。試掘時に溝を確認したグリッドを通る様に東西方向に幅4m、長さ20mのトレンチを設定し約80㎡にわたって遺構の検出に努めた。しかし3区と同様、わずかな土器を得たにすぎない。

調査は、各区とも遺構確認面まで重機によって排土し、後人力によって遺構の検出・掘下げに努めた。調査時期は梅雨時に重なったが雨が少なく天候には恵まれた。しかし、土は基本的に礫あるいは礫が大量に混入した土でしかも乾燥のため固く締まっていたため作業は困難を極めた。

第Ⅱ章　遺跡を巡る環境

第1節　自然環境

柿平遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原字柿平に所在する。

櫛形町は、山梨県の西部中央に位置し、山梨県元標（山梨県庁）からは約14kmの距離を隔てている。甲府盆地から西を望むと、南アルプス連峰と呼ばれる冬期白雪を頂く赤石山脈を仰ぎ、その前方にはやや高度の低い巨摩山地を望む。巨摩山地の中央には、櫛形山と呼ばれる大きく櫛の形をとった山塊がそびえているが、櫛形町はその山裾に発達した町で町名も櫛形山に由来するものである。

櫛形町は地誌的、地形的に大きく三様に区分され、それぞれ極めて対照的な特徴を示している。すなわち町内の西半部では櫛形山が大きな山容を誇り、中央部はその東麓に発達した市之瀬台地が占め、東半部は櫛形山から

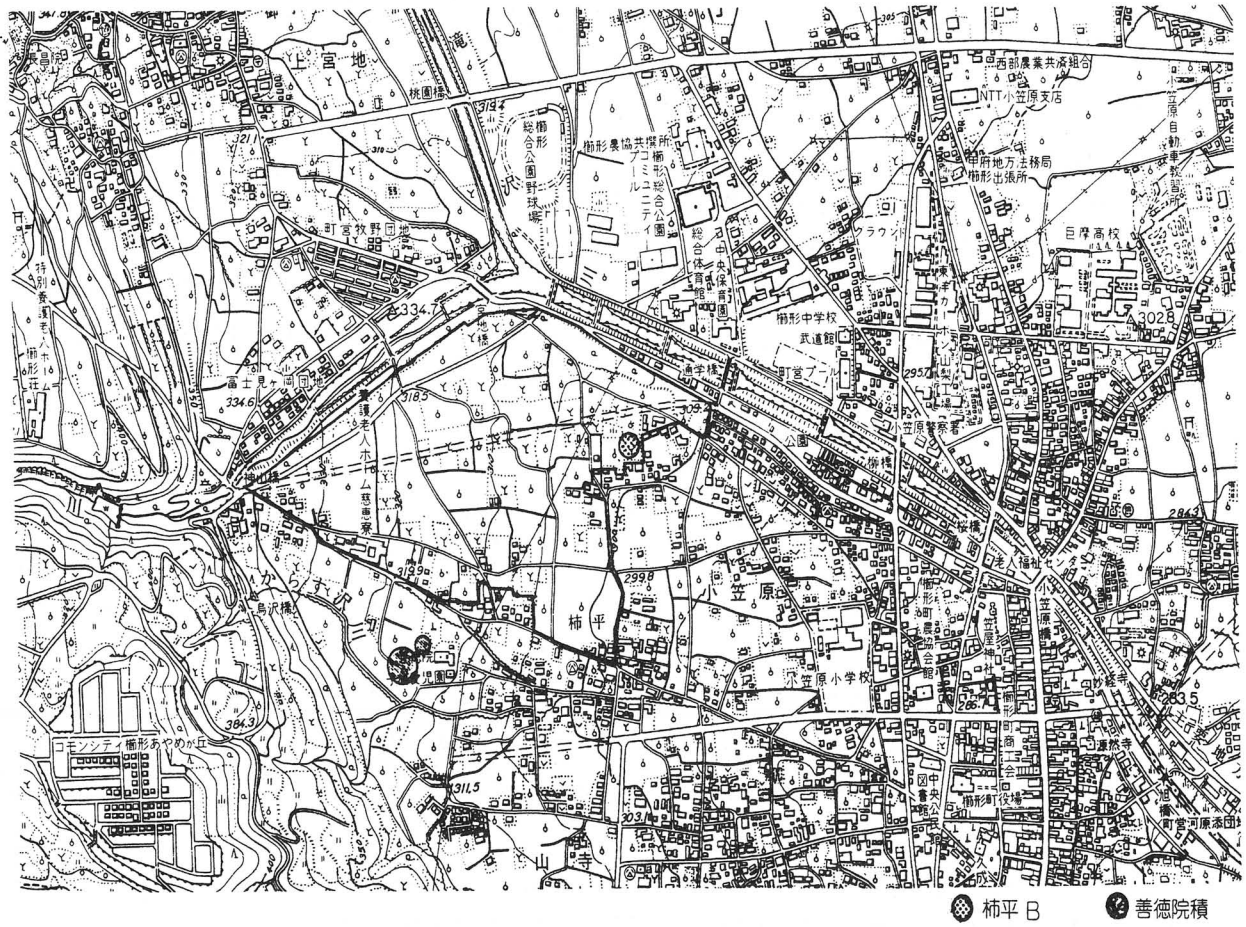
流れだした諸河川がつくりだした扇状地となっている。

櫛形山を主座とする巨摩山地やその背後に連なる赤石山脈は糸魚川ー静岡構造線の一部をなしているが、そのため櫛形山にも山腹に幾条かの断層崖地形が刻まれている。櫛形山の中腹に南北に連なる高尾、立沼、伊奈ケ湖、泊平等の平坦面や沼地は伊奈ケ湖断層によって生じた窪地を成因とするものである。さらに巨摩山地は上市之瀬断層によって、標高 400～ 500ｍで傾斜変更線を経て市之瀬台地と接している。

櫛形山の東麓にひろがる市之瀬台地は、上市之瀬断層前面に発達した更新世の扇状地が、甲府盆地形成に与った最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。台地は南北４km、東西 2,5kmの扇形平面を呈し、標高は 400～ 500ｍを示している。台地前面は比高差 100～ 120ｍを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床の扇状地へ至る。台地上面には新期信州ロームに対比される伝嗣院ローム層が覆い、その下部には古御岳に由来する黄白色軽石層（Ｐｍ－１）が存在する。

この市之瀬台地上面には、北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ、侵食地形を刻んでいる。櫛形山を水源とするこれらの諸河川は、上流では18°～22°という急激な勾配をもって流れ落ち、盆地床にいたると急激に流勢を弱め、みずから削り流した大量の土砂を堆積させる。こうして谷の出口から扇状地を造るが、これらは、有名な御勅使川の形成する大扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」をなしている。これらの扇状地にあたるこの一帯は古来から「原七郷」とよばれ「原七郷は月夜でも焼ける」といわれるほど極めて地下水位が深く水に乏しい乾燥地で、かつ豪雨時には洪水におそわれる水田経営に不適な地勢である。

地下に滲みこんだ水は扇端部では再び湧きだして、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧泉列をなしている。この湧泉列から低位は極めて水の豊富な一帯となり、釜無川の形成する氾濫原へ続いている。この氾濫原は水田経営を主体としてきた地域で、古来「田方」と呼ばれ、水に乏しい扇央部は乾燥



第２図　遺跡周辺地形図〔 １／15000〕

地帯で、「原方」と云われ桑畑や果樹園に利用されてきた。また、台地から扇頂部にかけては「根方」とよばれ、山の根にあって、谷川の水を利用した水田や台地上の畑に依ってきた。このようにこの地域の自然環境の特質はそれぞれの地域の生活・文化等と有機的な関係を示し、まさに地誌的な特徴を顕している。

今回調査を行った柿平地区は、櫛形町のほぼ中央部に位置し、市之瀬台地を流れ下ってきた深沢川の形成した小扇状地とほぼ重複し、区画整理事業北辺は この深沢川によって画されている。事業地西端部は深沢川の谷出口となって、東・西方向へ扇端部に向かって降っている。該地の標高は 300 ～ 340 m を測り、西半部ではややきつい傾斜を示すが、316 m の等高線付近からは穏やかな傾斜に変わる。この小扇状地内では、微地形的に幾状かの谷部が観察されるが、これは現河道確定前の旧河道の痕跡とも考えられる。また事業地北端部は、台地のさらに北から流れ出る高室川との合流点となり、地元の古老の話によっても明治以前は常に洪水におそわれた場所であると伝えられる。

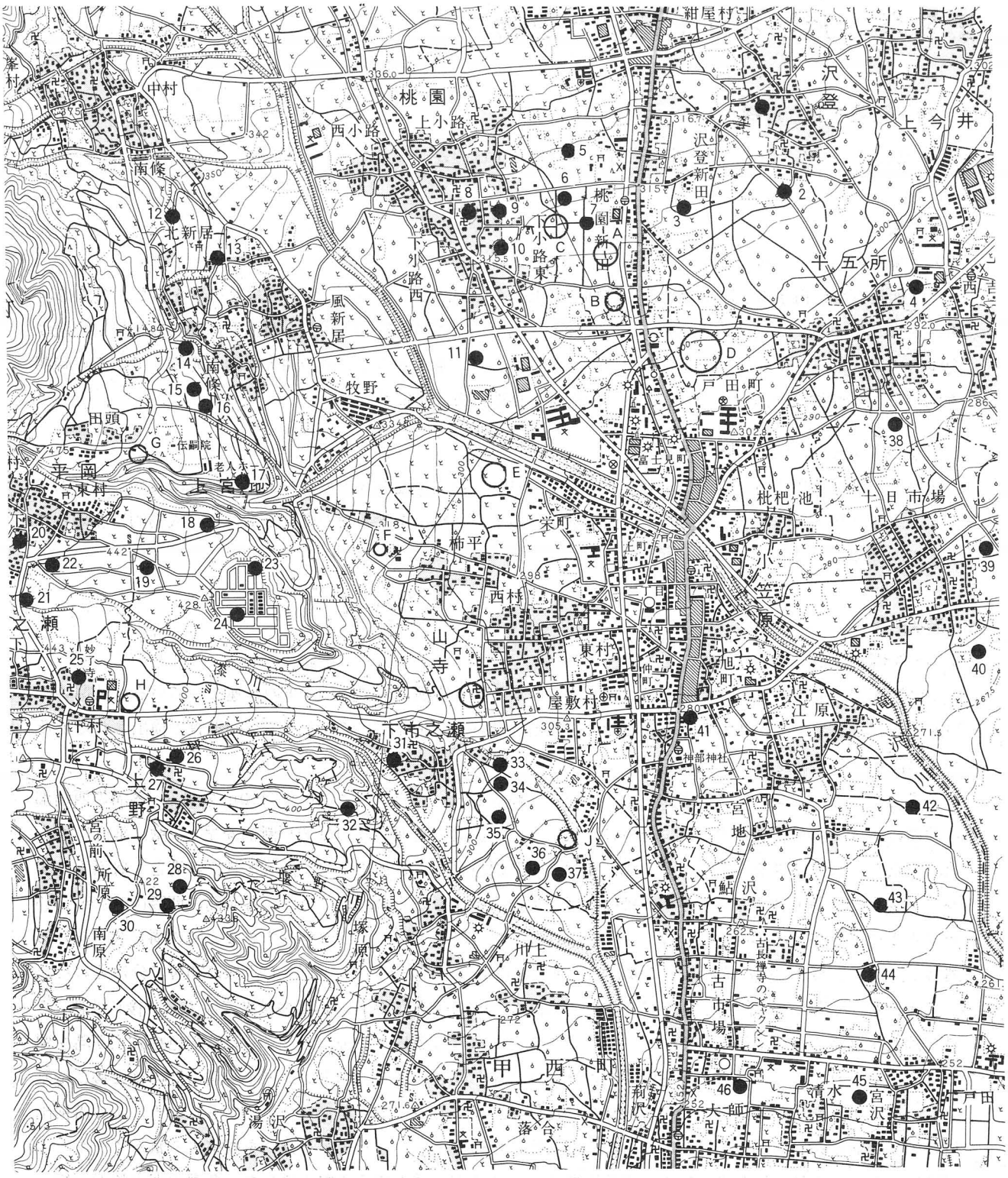
第2節　歴史的環境

釜無川の右岸、櫛形山の山裾に発展した櫛形町は、西半部を櫛形山とその東麓に形成された市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺の扇状地となっている。すなわち地形的に大きく山地・台地・扇状地に分類され、そのため地誌的にも極めて対照的な様相を示していることは前節において述べたところである。

遺跡詳細分布調査によれば、町内には現在245ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。遺跡は主要には台地、扇状地上に認められるが、櫛形山中の断層によって生じた平坦面にも縄文時代を中心とする遺跡が僅かながら確認されている。また、最近の甲西バイパスに伴う事前調査によって、従来「田方」と呼ばれた厚い堆積土に覆われた沖積地においても多くの遺跡が確認され、調査が実施されている。

町内において最も古い歴史的遺物は旧石器時代に由来するもので、市之瀬台地上からは数ヶ所（六科丘遺跡・長田口遺跡・長田A遺跡）にわたって旧石器時代にさかのぼる遺物がえられ、県内でも古い時代から人類の生活の場であったことを語っている。この台地上では以来、縄文時代、弥生時代を通じて遺跡が営まれており、特に縄文時代中期（長田口遺跡・長田A遺跡・中畑遺跡・東原A、B遺跡・上の山遺跡・古屋敷遺跡・かに原遺跡）、弥生時代終末（六科丘遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡等）の良好な集落遺跡が点在する地域である。この台地の縁辺部ではまた、いくつかの前期古墳（物見塚古墳・六科丘古墳）が連続して築造され、その時代に於ける地域の中心であったことを示している。台地下の扇状地では、台地裾部を中心に縄文時代・弥生時代所産の遺跡（曽根遺跡・北峰遺跡・北原A、B遺跡・鋳物師屋遺跡等）が確認されているが、扇状地における遺跡の一般的なあり方は、やはり平安時代以降遺跡が進出する事を示している。古墳時代の遺跡は台地裾部（曽根遺跡）及び湧泉列に沿って認められる程度であるが、平安時代になると町内全域に遺跡が営まれ、台地上にも再び進出する。近世の遺物は現在の集落と重なる分布状態を示し、現在の集落の成立時期を暗示している。

ところで、律令体制下では、本町内南半部から甲西町、増穂町にかけては『和名類聚抄』に甲斐国・巨摩郡九郷の一つとして所載されている「大井郷」に比定されている。また北半部から さらに御勅使川扇状地にかけては、平安時代から鎌倉時代にかけて「八田御牧」の一部をなしていたと考えられている。律令体制の崩壊後、甲斐国では甲斐源氏の一族が強大な勢力を持つに至るが、 本町一帯は、小笠原〔櫛形町〕、加賀美〔若草町〕、 秋山〔甲西町〕などの地名が示す様に、その一族が居館（伝小笠原氏館跡）を定めた地である。小笠原氏の祖小笠原長清に関係する遺跡は町内各所に残されており、また上野の台地上には小笠原氏の一族上野氏や、後、戦国時代に武田大井氏が拠った椿城が僅かに痕跡を止めている。町内にはその時代を物語る山城（中野城・笹砦）や石造物が各所に残され、中世以来の伝統や文化財を伝える社寺が多く現存している。江戸時代になると、西郡の中心として、駿信往還の要所として発展するが その姿は『甲斐国志』や『村明細帳』にうかがうことができる。 現在の集落の基礎はこの時期に形成されたものであろう。近代にはいり、明治4年（1871）山梨県が成立して以降、幾多の曲折を経たが最終的には昭和29年（1954）小笠原町、榊村、野之瀬村が合併し、さらに昭和35年（1960）豊村を併せて、現在の櫛形町に至っている。



A大新井C　B八反畑　C大新井E　D往還東A　E柿平B　F善徳院積　G伝嗣院原A　H清水C　I宝珠寺西　J切付

1. 永面B　2. 赤面C　3. 鼠作A　4. 十五所古屋敷　5. 宮原　6. 東畑A　7. 東畑C　8. 東畑F
9. 東畑E　10. 大新井G　11. 西原　12. 神明B　13. 神明A　14. 無名墳　15. 御崎古墳　16. 御崎神社横
17. 無名墳　18. 東原B　19. 長田口A　20. 平岡農村公園　21. 前田　22. 中畑　23. 六科丘古墳　24. 六科丘
25. 石原田　26. 上の山　27. 椿城　28. かに原　29. 東久保　30. 古屋敷　31. 下市之瀬大畑A　32. 物見塚古墳
33. 狐塚古墳　34. 狐塚A　35. 鋳物師屋古墳　36. 鋳物師屋　37. メ木　38. 村前東A　39. 新居道下　40. 二本柳
41. 下宮地　42. 白河東　43. 油田　44. 中川田　45. 大師東丹保　46. 住吉

第3図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔1／25,000〕

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

第１節　発見された遺構

今回の調査で確実に認定しうる遺構を検出しえたのは１区のみであった。

1．土　壙

１号土壙（第７図、図版３）

１区西端部に位置する。暗褐色ローム質粘土層上面から掘込まれている。平面形は長方形を呈し、各隅部は丸みを帯びている。規模は長辺2.3m、短辺1.9mを測る。深さは0.7～0.9mで、断面形は円筒形を呈し、壁は全体的にオーバーハングしている。覆土は３層に分けられ、拳大から子どもの頭大の礫が充満していた。時期を確定しうる遺物は検出し得なかったが、中近世の墓壙である可能性が高い。

２号土壙（第７図、図版４）

１区北端部に位置する。現耕作土直下から掘込まれている。平面形は不整形を呈し、規模は長さ２m以上を測る。深さは0.3～0.4mで、浅鉢状の断面を示す。覆土は１層で拳大の礫が充満しており、人為的に埋められたものと考えられる。

2．溝状遺構

１～８号溝状遺構（第５・６図、図版２・３）

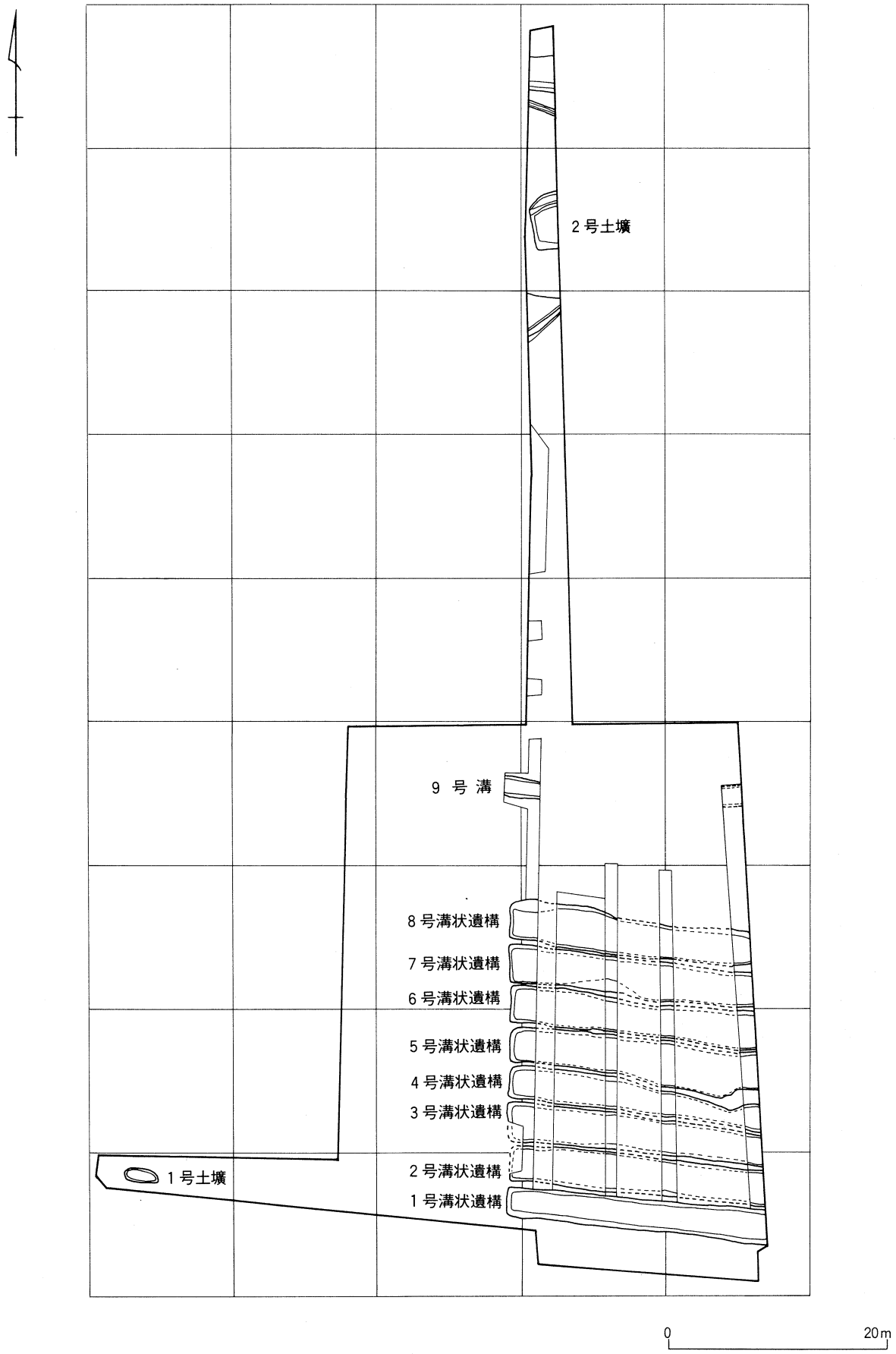
１区東南端に位置する。ほぼ同規模、同形状の８本の溝状遺構が接する様に東西に連なっている。試掘時にM区２及び４グリッドで２本の溝が並んで東西に走っているのを確認しているが、今回調査で検出された１及び２号溝がそれにあたる。

各溝ともほとんど同じ形状、規模を示している。幅は2.5～3.0m、深さは0.8～1.0mを測る。各溝の西端部は非常に揃っており、現在の畑境に見事に一致していた。溝の断面形はほぼ方形断面を呈し、壁は垂直に近く直状にたち、底面はフラットである。溝は地山の暗茶褐色ローム質粘土層中に掘込まれ、各溝とも底面をわずかに１及至２cm掘りすぎると、地山の細砂礫層に到達する深さで止められていた。各溝間の間隔は0.2から0.5mで人がやっと歩ける程の幅しかない。５・６号溝間の一部は、壁を２、３cm削りすぎると隣の溝に突き抜ける程接していた。覆土は、各溝によって微妙な差異は存在するが、基本的には図５・６の様に26層に分けられた。

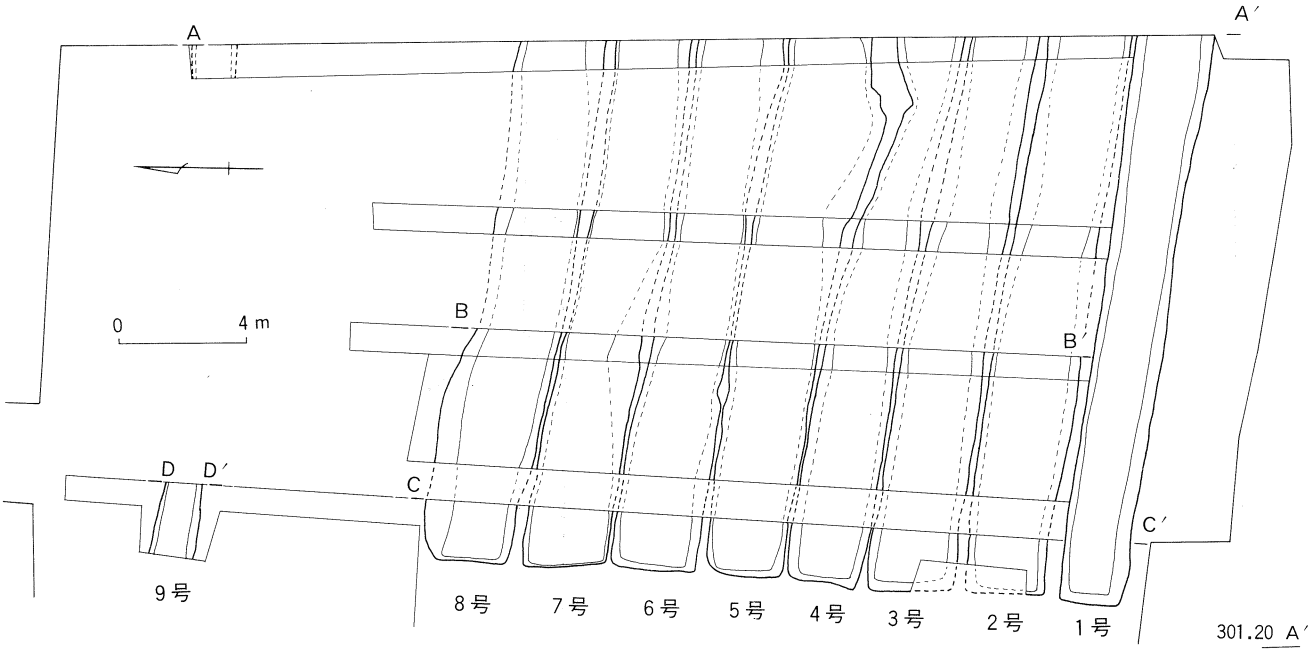
各溝とも、人頭大の礫を含む土砂（14・25・26層）は南側から埋没過程の初期の段階で流入し、後に北側から礫、砂礫が互層をなして流入している。さらにその上部には厚さ10～20cmにわたって暗茶褐色粘質土が溝を覆う様に認められた。この粘質土は各溝の上部ともほとんど同じ状態で、例えば３・４号溝の間の様に後に攪乱を受けたと思われる部分以外では平面観察時に違いを認識する事はできなかった。サブトレンチによる溝検出後の土層断面観察によって、はじめて細礫の混入度の相違などといった微妙な違いを観察する事ができた。土層堆積がきれいな流れ込みの状態を示す等疑問点はのこるが、溝を覆う粘質土の存在、各溝の埋没状況が揃いすぎていることなど人為的なものである感を拭いきれない。

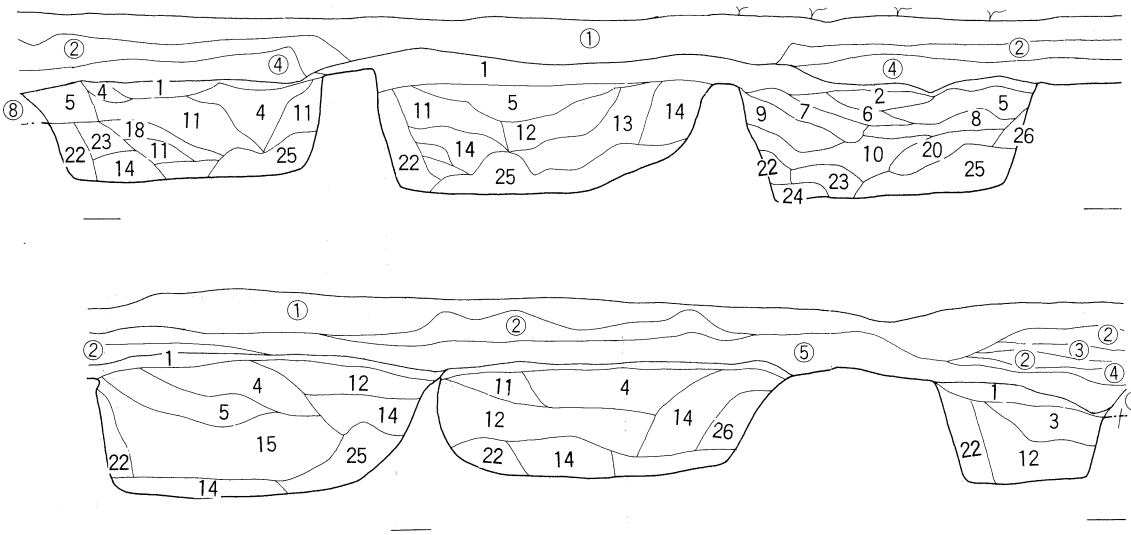
９号溝（第５・６図、図版４）

１～８号溝の北、７m程から検出され東西に走る溝である。試掘時にM区５グリッドで東西に走っているのを確認した溝である。幅は上部で1.8m、底部で1.1mを測り、深さは1.4m を有する。掘込面は耕作土直下である。断面形は、上面から0.6m 程でロート状にせばまりを見せるが、これはこの部分が礫層に掘り込んでいるため壁の崩落が激しかったためと思われる。それ以下では壁は垂直に立ち、底面はフラットである。覆土は５層に分けられたが、全て砂礫層で一時的に埋没したものであろう。

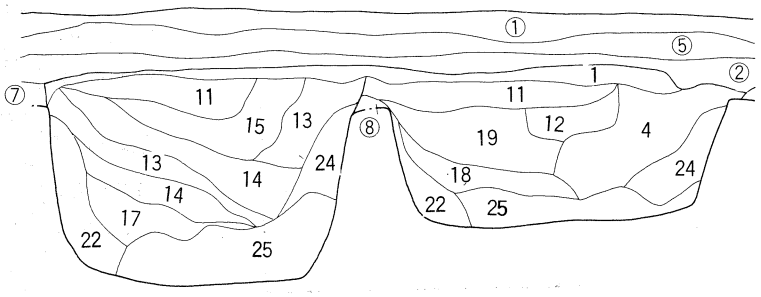


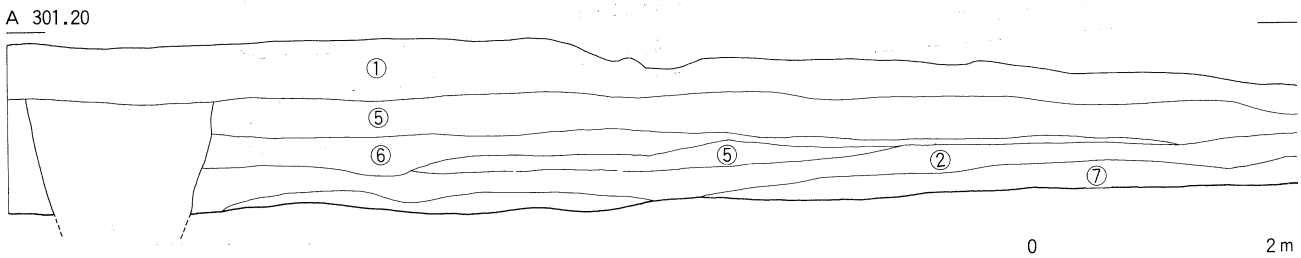
第4図　柿平B遺跡全体図〔1／400〕



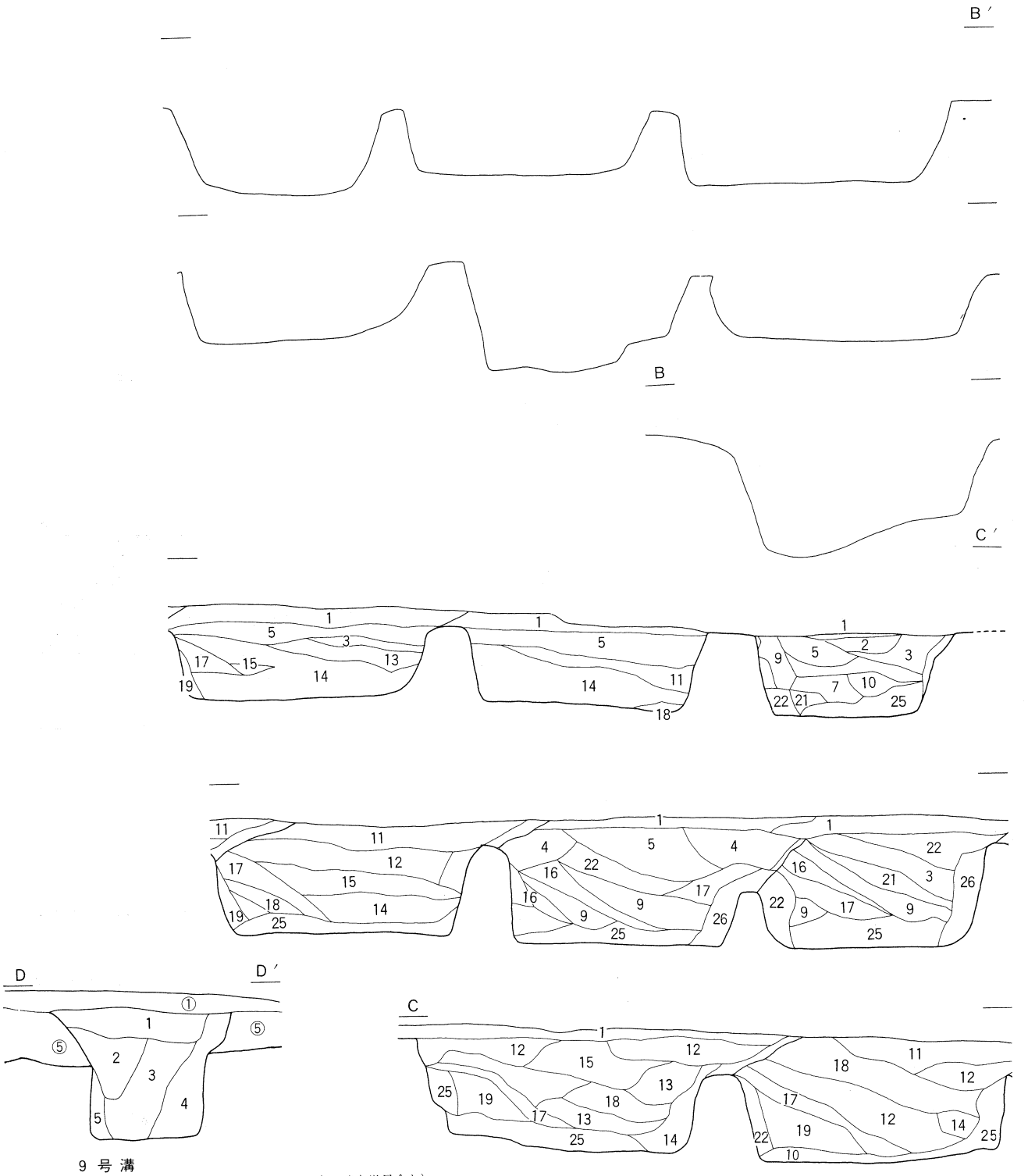


第①層：耕作土
第②層：砂礫層（指頭大の礫主体）
第③層：砂　層（５mm程の礫を多く含む）
第④層：砂礫層
第⑤層：礫　層（指頭大～子供の拳大の礫主体）
第６層：砂　層（５mm程の礫が縞状に混入）
第⑦層：砂礫層（砂を多量、指頭大の礫を少量、拳大の礫を微量含む）
第⑧層：砂礫層（子供の拳大～指頭大の礫主体）





第５図　１～８号溝状遺構・９号溝 (1)〔１／240，１／60〕



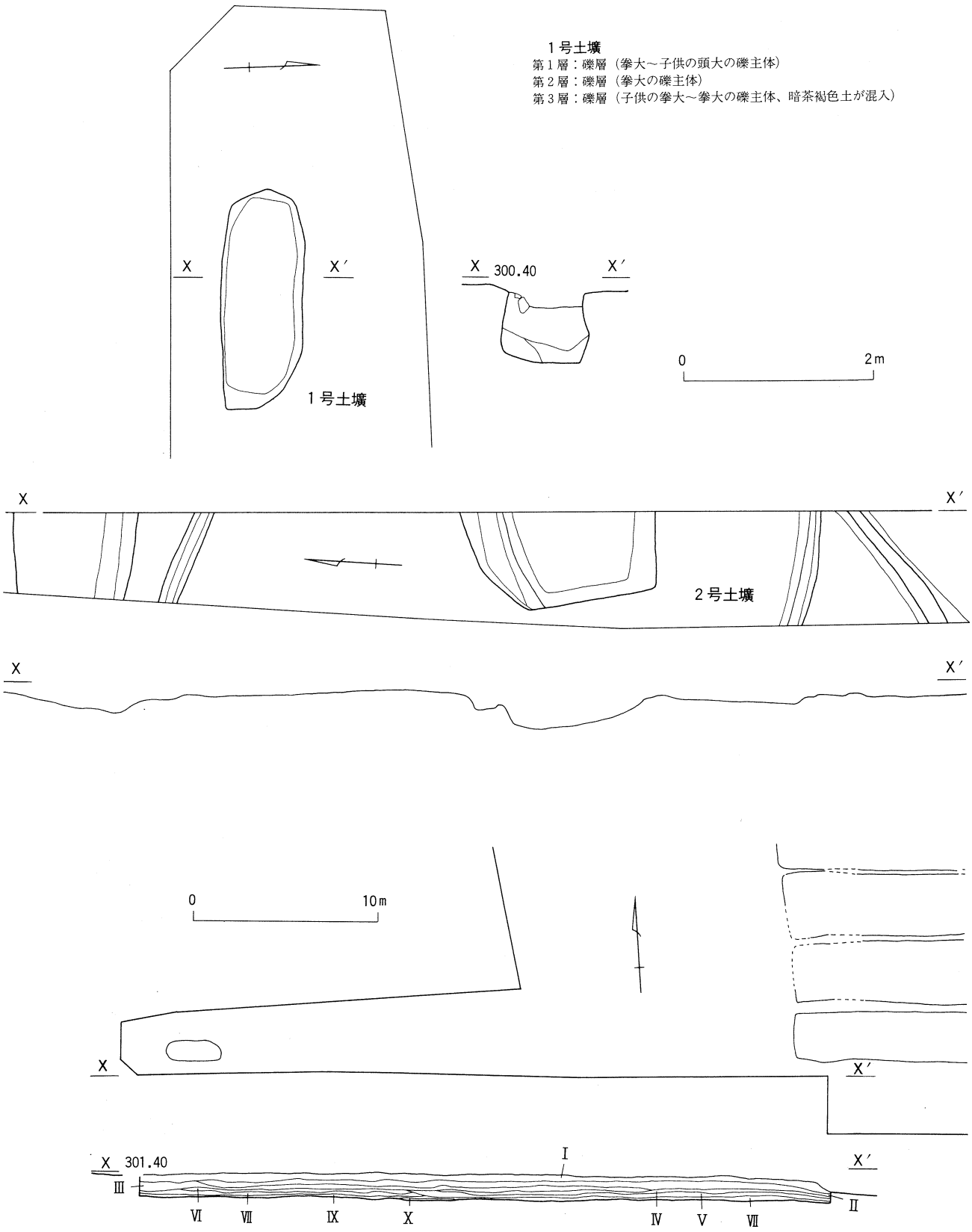
9 号 溝

第１層：砂礫層（１～２㎜程の礫主体、拳大の礫を微量含む）
第２層：砂礫層（５㎜程の礫主体）
第３層：礫　層（指頭大の礫主体）
第４層：礫　層（拳大の礫主体、人頭大の礫を少量含む）
第５層：砂　層（５㎜程の礫を少量含む）

１～８号溝状遺構

第１層：淡茶褐色土層（粘性やや強、しまり有、粒子密・微細礫が微量混入・人為的に覆ったもの）
第２層：茶褐色砂礫層（１㎜程の礫主体、指頭大の礫を少量含む）
第３層：茶褐色砂礫層（指頭大の礫主体、大豆大の礫を中量含む）
第４層：茶褐色 土 層（粘性弱、しまり無、粗子やや粗、指頭大～拳大の礫が中量含む）
第５層：茶褐色砂礫層（大豆大～指頭大の礫主体、拳大の礫を中量含む）
第６層：茶褐色 砂 層（指頭大の礫を多量、拳大の礫を少量含む）
第７層：黒茶褐色砂礫層（１㎜程の黒色礫主体、拳大の礫を少量含む）
第８層：茶褐色砂礫層（１㎜程の礫主体、子供の拳大礫を多量含む）
第９層：黒茶褐色砂礫層（１㎜程の黒色礫主体、指頭大の礫を少量含む）
第10層：黒茶褐色砂礫層（小大豆大～指頭大の礫主体、１㎜程の黒色礫を少量含む）
第11層：茶褐色砂礫層（指頭大の礫主体、茶褐色土が部分的に縞状に入る）
第12層：茶褐色砂礫層（小豆大の礫主体、砂粒を多量含む）
第13層：茶褐色砂礫層（指頭大の礫主体、拳大の礫を少量含む）
第14層：褐色礫層（指頭大～拳大の礫主体、拳大～人頭大の礫を多量含む）
第15層：茶褐色砂礫層（小豆大の礫主体、指頭大の礫を少量含む）
第16層：茶褐色 土 層（粘性弱、しまり無、粒子粗、５㎜程の礫を多量、指頭大の礫を少量含む）
第17層：茶褐色砂礫層（小豆大～指頭大の礫主体、茶褐色土が縞状に混入）
第18層：茶褐色砂礫層（指頭大の礫主体）
第19層：茶褐色砂礫層（小豆大の礫主体、指頭大の礫を少量含む）
第20層：茶褐色砂礫層（小豆大の礫主体、拳大の礫を中量含む）
第21層：茶褐色 砂 層（粘性弱、しまり無、粒子粗、１㎜程の黒色礫を多量含む）
第22層：淡茶褐色砂層（粘性弱、しまり無、粒子粗、指頭大の礫を微量含む）
第23層：褐色礫層（子供の拳大の礫主体、指頭大の礫を多量含む）
第24層：褐色礫層（子供の拳大の礫主体、１㎜程の礫を少量、人頭大の礫を微量含む）
第26層：褐色礫層（人頭大～子供の頭大の礫主体、茶褐色土を少量含む）
第26層：褐色砂礫層（子供の頭大の礫を多量、茶褐色土を中量含む）

第６図　１～８号溝状遺構・９号溝(2)〔１／60〕　0　2m



基本土層

Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層（粘性やや有、しまりやや有、粒子粗・頭大～拳大の礫が多く混入）
Ⅲ層：砂礫層　（指頭大の礫主体）
Ⅳ層：砂礫層　（大豆大の礫主体）
Ⅴ層：砂礫層　（拳大の礫主体、指頭大の礫混入）
Ⅵ層：砂礫層　（砂を多く含む）
Ⅶ層：砂礫層　（指頭大の礫主体、砂が混入、部分的に拳大の礫が入る）
Ⅷ層：礫　層　（砂を多く、拳大の礫が多量に混入）
Ⅸ層：砂　層
Ⅹ層：暗褐色土層（ローム質）

第7図　1・2号壙及び基本土層図（南壁）〔1／60，1／300〕

第２節　出土した遺物

今回の調査で発見された遺物はごく少数であった。また、細片化も進んでいたため図化しえたものもわずかであった。

1　鉢の口縁部破片である。胎土に金雲母と細砂粒を多く含み、固く焼き締められる。色調は淡茶褐色を呈し、外面には煤が付着している。表面にはロクロ成形痕がよく残る。

2　内耳土器の口縁部破片である。胎土に雲母、長石を多量に含み、焼成は良好である。色調は外面暗茶褐色、内面淡茶褐色である。

3　かわらけ片。１／３ほどが遺存し、口縁部径10.3cm、底径5.4 cm、高さ2.7cmである。色調は明赤褐色を呈し焼成は良好、胎土は密である。体部はナデ、身こみ部はヘラ状工具による回転ナデ、底部は回転糸切りである。体部は反り気味に立ち上がり丁寧な造りである。

4　高台付茶碗の底部である。底径 5.8 cm、高台径 5.1 cmを測る。内面には茶色から黒色系の釉が厚く施され、いわゆる天目茶碗であろう。外面は淡茶褐色でロクロ成形痕がよく残る。一部に釉の痕跡が残り、底部の他は釉が施されたものであろう。

5　青磁の茶碗底部。かなり厚手の造りで、底径、高台径とも 5.8 cmを測る。胎土は密であるが、やや灰色味を帯びる。

１から５は、16世紀代戦国末から江戸初頭の所産であろう。

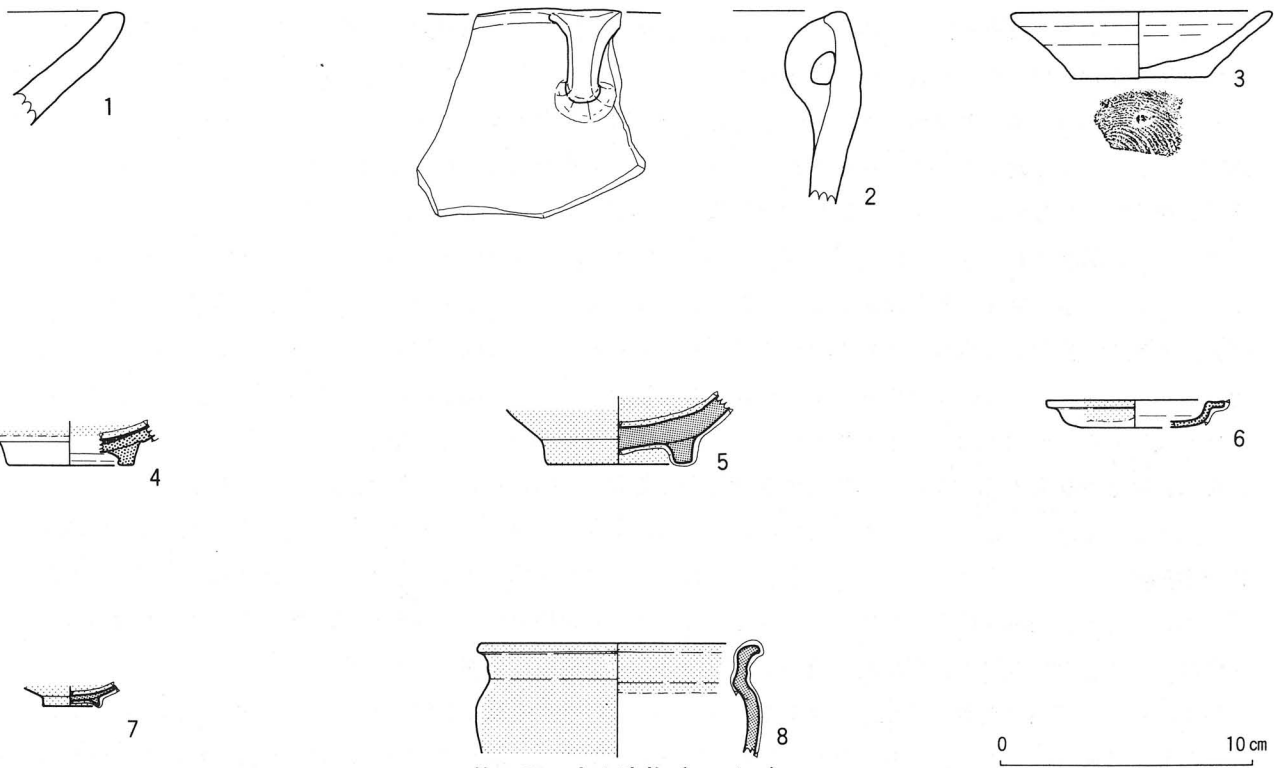
6　浅い盤状の陶器である。口縁部径7.1cm、底径4.2cm、器高1.1cmを測る。色調は茶褐色、胎土は密、焼成はは良好である。口縁部から体部外面に淡茶灰色系の釉が施される。近世後半の所産であろう。

7　ごく小さな碗の底部で、底径は2.2cmである。きれいな白色釉が施される。

8　小型壺の口縁部破片である。口縁部径11.2cm、肩部径11.1cmを測る。口縁部内外面、胴部外面は淡青灰色の胴部内面は白色の釉が施される。胎土は密、焼成は良好である。

７・８は近代初頭のものであろう。

１は１号溝状遺構覆土から、２は２号溝状遺構覆土から出土した。他は全て確認面上位の一括出土遺物である。



第８図　出土遺物〔１／３〕

第Ⅳ章　調査の成果と課題

平成４年度における試掘調査の折りには完形の雁股鏃、かわらけ片等が出土したこともあり、中世所産の遺構・遺物が期待された。今回の調査はその際、遺構等が確認された地点を中心に実施されたが、断片化した戦国末期の遺物を発見したほかは初期の目的とした遺構を確認する事はできなかった。しかし、近代初頭と考えられる溝状遺構等を発見する事ができた。ここに若干のまとめを行いたい。

１区の東南端部から非常に密集した８本の溝状遺構が確認された。この溝状遺構の一部は試掘調査時にも確認され、またこの区では中世所産の遺物が発見されたこともあり、同期の遺構とも考えられた。前述した様に、この溝状遺構はほぼ同規模、同形状のものが８本接する様に東西に連なり、各溝状遺構はそれぞれ幅は2.5～3.0m深さは0.8 ～1.0m を測る。各溝状遺構は地山の暗茶褐色ローム質粘土層中に掘込まれ地山下層の細砂礫層に到達するわずかに上部で止められていた。各溝状遺構間の間隔は0.2～0.5m で人がやっと歩ける程の幅しかなく、また底部では水が流れた形跡も確認できなかった。溝状遺構８本全体の形状からみても、溝状遺構自体で区画用に用いるとか、水を流すといった用途に使われたものとは考えられず、つまり溝を穿ったとするよりも、地山に含まれるローム質粘土を採集するため溝状に掘ったものと考えたい。このことは、覆土が人為的に埋められた可能性があること、さらにその上部には厚さ10～20cmにわたって暗茶褐色粘質土が溝状遺構を覆う様に認められたことなどからも推察される。さらにこの各溝状遺構上部の粘質土は全ての溝状遺構を一気に覆ったものではなく、南の１号溝状遺構から順次その上部を覆う様に観察される。つまり溝状遺構１本ずつを、南から掘っては埋め掘っては埋めと繰り返した結果であろう。また、遺構の年代については、確実に伴う遺物がなく明確にしえない。１・２号溝状遺構覆土からは戦国末と思われる遺物が出土しているが、流込みの可能性が非常に強い。基本土層の観察では、この溝状遺構の上面では耕作土下にみられる茶褐色土が観察できず、比較的最近掘削された可能性を窺わせる。

では、何の目的でまた何故に規則的に土を掘り出したのであろうか。

１～８号溝状遺構の北で、不整形の２号土壙が検出されているが、この土壙も暗茶褐色ローム質粘土層中に掘込まれたものである。櫛形町内の甲西バイパス建設予定地内遺跡からも同形態の土壙や、幅２～３ｍで長さ４～５ｍの土壙が多数検出され、近代初頭の粘土採集用の土壙[*6]　とされており、この２号土壙も同じ目的のものと考えられる。櫛形町の隣町若草町は近世初頭から瓦造りが盛行した地域で、今でこそ三州（愛知県）から原料を調達するが、かっては地元の粘土を採集した[*7]　とのことで櫛形町内にもその痕跡が残っている。この１から８号溝状遺構も、瓦の原料としてローム質粘土を採集した結果である可能性が高い。

このように溝状に長く粘土を採集した場合、前記した土壙状に採集するのに比し一度に何倍もの土が採掘できよう。それに一定の断面（幅と深さ）を持つ溝であれば土量計算もしやすかったのではなかろうか。また一定の区画内の粘土を採掘する場合、区画の端から溝状にしかも溝を接する様に掘り進む方法が一番無駄のない方法と思われる。ところで、この遺跡の様に畑一枚にも及ぶ範囲で粘土を採掘した場合、埋め戻した後の表土(耕作土)の保水性はかなり悪化することが予想され、溝上部を覆った粘土層はその対策として行なわれたのであろう。これらは、粘土を採掘する人間と、その土地を所有する人間との関わりの一部を表現しているのではなかろうか。

今回の調査では、さらに一基のみとはいえ中・近世の遺構を発見する事ができた。他の箇所では、立会部分も含め遺構を検出することはできなかったが、この柿平地区に当該期の遺跡が存在することは明確にしえたものとはいえよう。その明確な時期、性格は明らかではないが、この地区に代表される扇状地内においても遺構の存在を確認しえたことは今後の櫛形町内の遺跡を検討するうえで貴重な事例といえよう。

以上の様に、今回の調査では粘土の採掘壙という いわば特殊な遺構を発掘したのであるが、今回の成果は近代初頭における産業の一面と、それをとりまいた地域社会の関係の一部を考古学的に明らかにした作業といえ、今後の地域社会研究の一助となれば幸いである。

附　章　これまでの町内遺跡調査の成果

第１節　伝嗣院原遺跡の調査

１）調査に至る経緯

山梨県では県内を一巡する広域農道の建設を計画しているが、昭和62年度から富士川西部地区櫛形工区の建設にかかることとなった。まず第１年度において伝嗣院原遺跡ののる市之瀬台地を開析する深沢川にかかる橋脚を建設する事となったため、山梨県峡中土地改良事務所、山梨県文化課、櫛形町産業振興課、櫛形町教育委員会において、埋蔵文化財保存のための協議、現地踏査を実施した。その結果、昭和62年度においては伝嗣院裏の50ｍ（約500㎡）の区間については発掘調査を実施することとし、櫛形町教育委員会が担当することとした。

調査期間　　昭和62年２月８日～同月９日

調査面積　　約320㎡

２）遺跡の位置と環境

伝嗣院原遺跡は櫛形町上宮地字伝嗣院原に所在する。

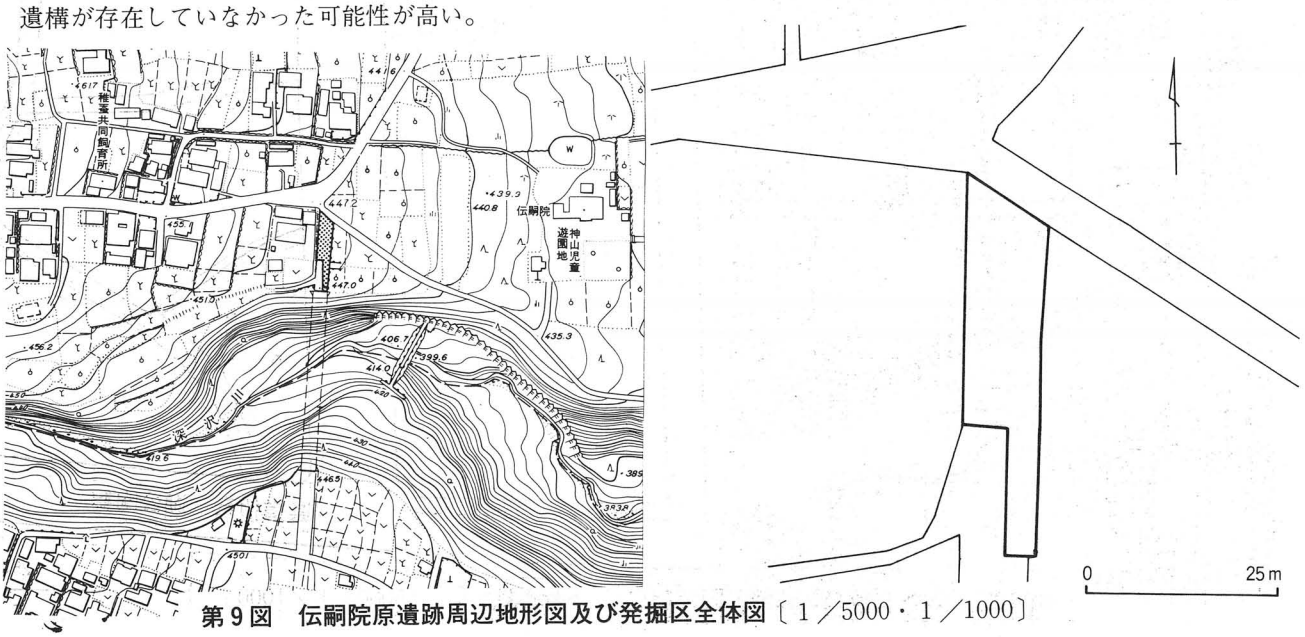
櫛形町の中央部は、甲府盆地形成にかかる最新の断層運動によって形成された市之瀬台地が占めている。台地は扇形を呈しているが、幾つかの小河川によって開析されて小台地に分けられており、伝嗣院原は台地中央やや北、深沢川の開析した深い谷を南に臨む位置にあたる。

市之瀬台地には、六科丘遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡等先土器時代から弥生時代終末までの遺跡が知られている。台地先端には物見塚古墳・六科丘古墳等の前期古墳がならび伝嗣院原に北隣する御崎に所在する稲荷神社裏にも古墳が存在している。また遺跡東には隣接して伝嗣院が存在する。現在はわずかに庫裡を残すのみであるが、中世においては名刹として知られ、広大な伽藍を有していたと伝えられる。

３）調査の経緯と成果

調査はグリット法とトレンチとを併用した。発掘区北半30ｍ程は10×10ｍのグリットを設定して全面的に調査を実施し、同南半部は２×20ｍのトレンチを設定し、遺構が確認され次第拡張することとした。表土は重機で排土し後人力によって精査を行った。

今回の調査区は、表土が著しく薄く北半部で20㎝、南半部では５㎝程でハードローム面となってしまった。そのため遺構は検出できず、南半部トレンチから昭和初期の水路の痕跡が発見されたのみである。また土器片も４点発見したにすぎなかった。すべて小破片で図化しえないが、１点は土師器、他は縄文中期所産のものである。この市之瀬台地上では、通常ローム面をかなり掘込んで遺構を構築することから考えて、今回の調査区の中には遺構が存在していなかった可能性が高い。



第９図　伝嗣院原遺跡周辺地形図及び発掘区全体図〔１／5000・１／1000〕

第２節　小笠原警察野之瀬警察官駐在所建設用地内（清水Ｃ遺 跡）試掘調査

１）調査に至る経緯

山梨県警察、小笠原警察署は櫛形町上市之瀬に所在する野之瀬警察官駐在所の老朽化に伴い、やや離れた場所に新築する計画をたてた。たまたま同地は、清水Ｃ遺跡として周知されていた埋蔵文化財包蔵地内に含まれていた。地形現状からは次に述べる様に、遺跡の可能性は低かったが現地踏査において若干の土器片が採集されたため、万全を期し試掘調査を実施することとし、櫛形町教育委員会が担当することとした。

調査期間　　平成２年６月４日

調査（試掘）面積　約 12㎡

２）遺跡の位置と環境

遺跡は櫛形町上市之瀬字清水に所在する。

櫛形町の東半部は、櫛形山とその前面に発達した市之瀬台地が占めている。台地は扇形を呈して大きく拡がっているが、その上面は櫛形山から流れ降る小河川によって開析されて幾つかの谷と小台地に分けられている。清水遺跡は市之瀬川と漆川につくられた谷状地上端部に位置し、南に市之瀬川、北に漆川と両河川に挟まれている。

市之瀬台地の平坦面には、六科丘遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡等先土器時代から弥生時代終末までの遺跡が知られている。清水遺跡は、北東に六科丘遺跡、南東に上の山遺跡を眺める位置にあり、南臨する市之瀬川の対岸絶壁上には上野城が築かれていた。また遺跡を西に50ｍ程進んで尾根状にふくらんだ位置には、妙了寺が存在し中世からの大寺院として知られている。

３）調査の経緯と成果

駐在所敷地が 316 ㎡と狭かったため、建物建設予定地内に３ヵ所の試掘坑を設定し、掘削の進展に合わせ必要が生じれば拡張することとした。

調査は全て人力で掘削した、しかし全ての試掘坑において地表下40～50㎝で市之瀬川の氾濫によるものと思われる礫層にあたってしまった。礫は上部では人頭大であったが、10～15㎝掘り進むと長径１ｍに及ぶ礫が重なって堆積していたため調査を完了した。

第10図　清水Ｃ遺跡周辺地形図及びグリッド配置図〔１／5000・１／1000〕

第3節　山際住宅団地造成地内（善徳院遺跡隣接地）試掘調査

1）調査に至る経緯

山梨県住宅供給公社では、平成3年度において櫛形町山寺山際地内で総数68戸にのぼる住宅団地造成事業を計画した。同地東には善徳院横遺跡が存在し、地元の古老の話では周辺で井戸掘削時に土器を発見しているとのことでもあった。そのため櫛形町教育委員会は、山梨県住宅供給公社と埋蔵文化財保護についての協議を行い、事業予定地東半部について試掘調査を実施し、遺跡と確認された場合は別途対応を講ずることとした。

調査期間　　平成3年4月10日～同月25日
調査面積　　約48㎡

2）遺跡の位置と環境

櫛形町の市街地小笠原は、櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地上に成立っている。山寺地区は小笠原から扇状地を西に登った位置にある。今回の事業予定地は深沢川、滝沢川の形成した扇状地の西側縁部にあたり、市之瀬台地との傾斜変更線に近い。この扇状地内では数ヶ所の遺跡が知られ[*8]ており、過去においての試掘調査を実施[*9]してきたが、明確な遺構の発見はなしえていない。この山寺、小笠原地内には小笠原氏館跡、廃曹源寺等中世から近世にかけての遺跡が期待されているが現在のところ確認されていない。

3）調査の経緯と成果

住宅団地造成事業地は、15600㎡に及んでいるが、前述した様に造成事業地は善徳院横遺跡よりやや西にずれて位置していることもあり、事業地の東辺3200㎡を試掘対象範囲とした。試掘は対象範囲内を16mの方眼に区切り、2×2mのグリッドを設定した。グリッドは18ヶ所設けたが、諸般の事情から実際に調査したグリッドは12ヶ所であった。掘削はすべて人力によって行なった。第4グリッド以外は、地表下50～90cmで砂礫層に達し、それ以下は砂層及び礫層が互層をなして厚く堆積していた。特に第8・7・10グリッドで認められた13層は子供の頭大の礫が主体となる層である。耕作土層と砂礫層との間も小礫を多量に含む土層であったが、2～9層ではローム粒を含む暗黄褐色土層が認められ、わずかながら遺物も出土している。そのため遺構の発見も期待されたが検出することはできなかった。遺物は、弥生時代、中世所産の土器であるが磨耗が激しく図示しえない。

第4節　善徳院横遺跡隣接地における宅地造成に伴う試掘調査

1）調査に至る経緯

㈱博友は、櫛形町山寺字山際地内において宅地造成を計画した。同地は善徳院横遺跡に隣接し、過去の試掘調査[*10]でも遺構の検出はなしえなかったものの土器を発見していた。そのため櫛形町教育委員会は、㈱博友に試掘調査の必要を説明し理解を求めた。協議の結果、試掘調査を実施し、遺跡と確認された場合は別途対応を講ずることとした。

調査期間　　平成4年4月13日～14日
調査面積　　約32㎡

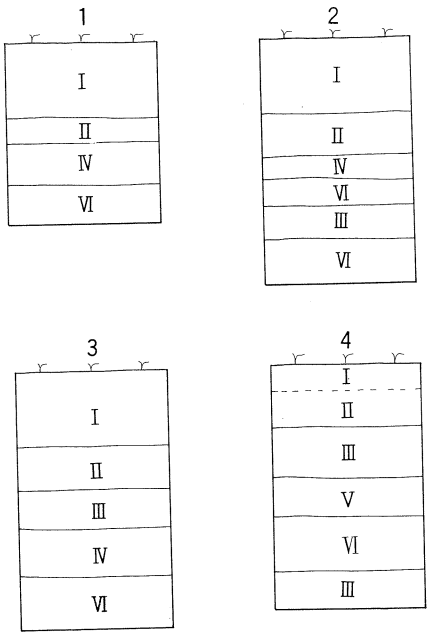
2）遺跡の位置と環境

櫛形町の東半部を占める扇状地上で、山際住宅団地造成地と善徳院横遺跡に挟まれた位置にある。

3）調査の経緯と成果

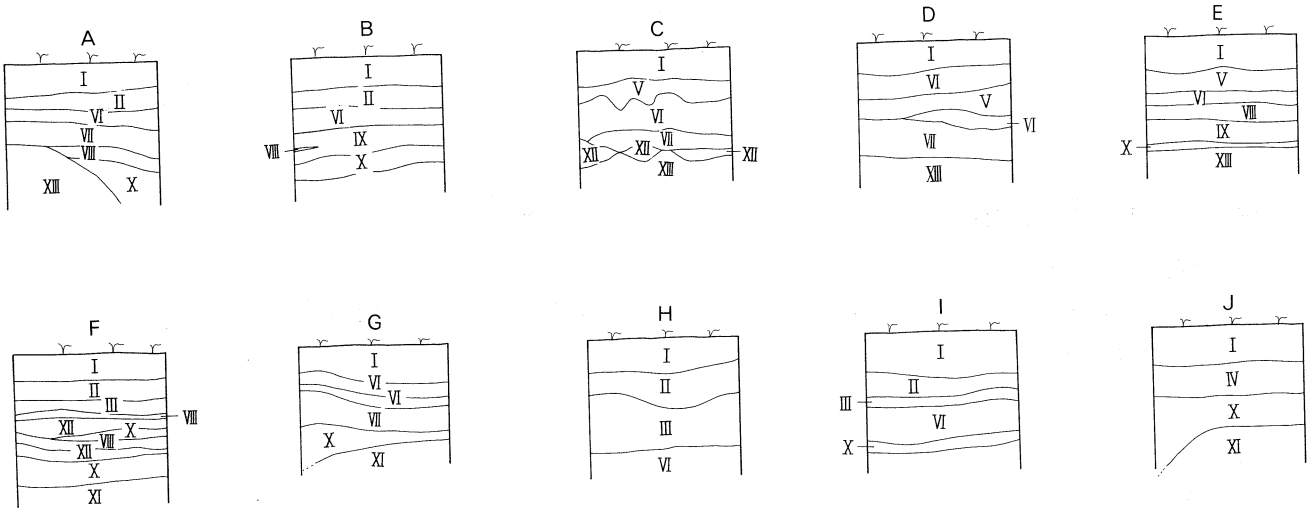
約1000㎡の造成地の長軸に沿って15m間隔で、2×2mのグリッド4ヶ所を設定した。4グリッドとも、第1層耕作土の下層は赤褐色粘質土層となっている。さらにその下層は砂層及び礫層が互層をなして厚く堆積しており、第4グリッドを重機によって深掘した結果、地表下4mまで達していた。

遺構は検出できず、遺物も磨耗の激しいもの数点を発見したのみである。



1～4

1層：耕　作　土
II層：赤褐色土層（粘性強、しまり有、ローム粒子を含む）
III層：青褐色砂礫層
IV層：赤褐色土層（粘性やや強、しまりやや有、拳大の礫を含み、ローム粒子が微量混入）
V層：砂　礫　層（大豆大の礫主体）
VI層：砂　礫　層（拳大の礫主体、大豆大の礫を含む）



A～J

I層：耕　作　土
II層：茶褐色土層
III層：暗茶褐色土層（小礫・赤色粒子を少量含む）
IV層：暗茶褐色土層（小礫を含む）
V層：暗茶褐色土層（粘性強、しまり有）
VI層：暗黄茶褐色土層（ローム粒子を多量含む）
VII層：茶褐色土層（指頭大の礫を多量含む）
VIII層：暗茶褐色土層　（大豆大の礫を少量含む）
IX層：灰青色砂礫層　（指頭大の礫主体）
X層：灰青色砂礫層　（子供の頭～拳大の礫主体）
XI層：暗褐色砂質土層（粘性弱、しまりやや有）
XII層：灰青色小礫層　（大豆大～指頭大の礫主体）
XIII層：礫　　層　（子供の頭大の礫主体）

〔1／2400 ・1／60〕

第11図　山際住宅団地造成地内試掘グリット配置図及び土層化面概念図

第５節　切付遺跡の調査

１）調査に至る経緯

㈱峡西開発は、櫛形町下市之瀬字切付において資材置場の建設を計画、埋蔵文化財の有無、取扱いについて櫛形町教育委員会に問合わせた。現地は切付遺跡と重複しており、工事内容も土地の改変を含むということで有ったため、櫛形町教育委員会は山梨県教育委員会の指導のもと、建物敷地の調査の同周囲の試掘調査が必要で有る旨回答し理解を求めた。協議の結果、調査を実施し、櫛形町教育委員会が担当することとした。

調査期間　　平成３年11月18日～同月29日

調査面積　　約170㎡

２）遺跡の位置と環境

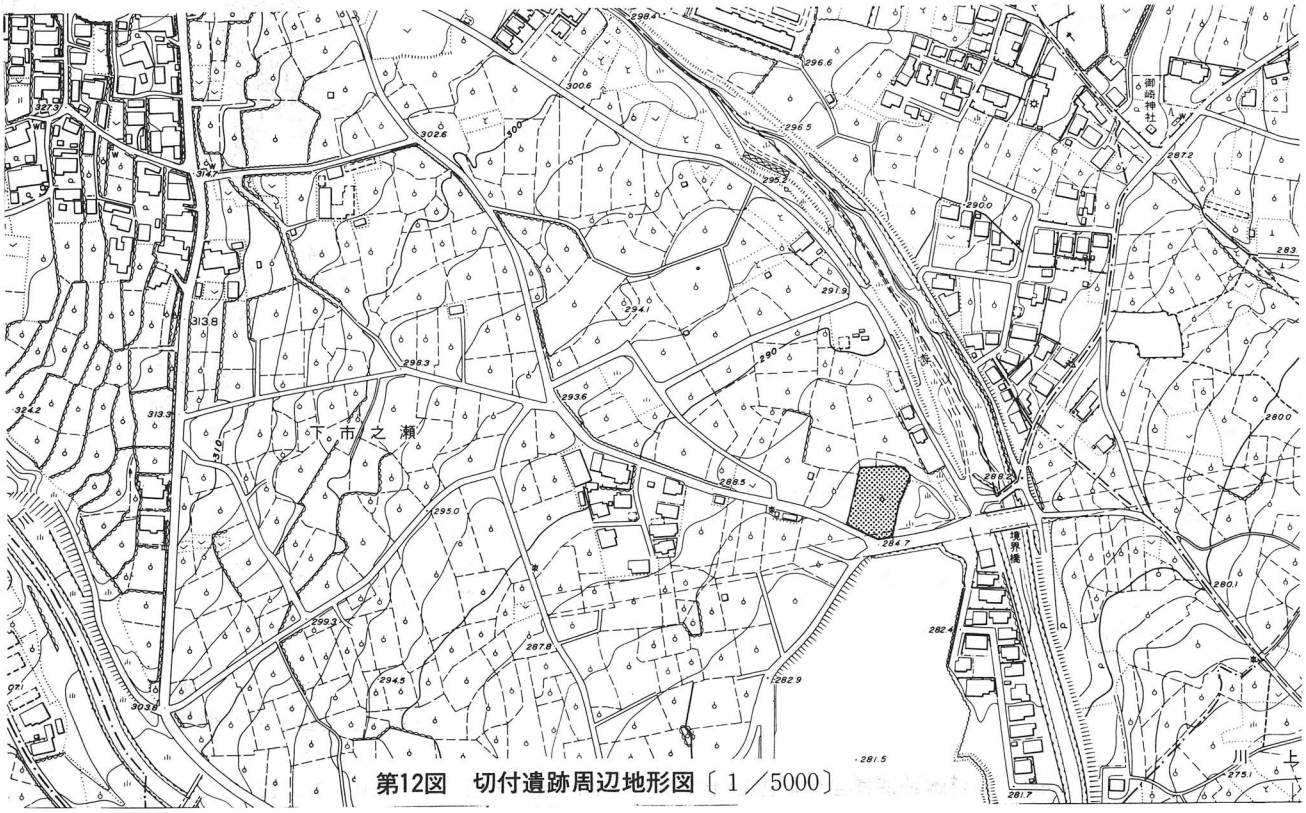
遺跡の所在する櫛形町下市之瀬字切付は、櫛形町の南部にあり櫛形山から流降った市之瀬川と漆川の造った扇状地上に位置する。遺跡は漆川から西へ20m程しか離れていない。今回の事業地は漆川河底とほぼ同じ高さにあり、漆川の河川改修がおわるまでは常に水害に脅かされた所である。遺跡南西30m程には、縄文中期、平安朝の大集落跡である鋳物師屋遺跡群[*11]が存在し、漆川を200ｍ程遡ると狐塚古墳が存在している。

３）調査の経緯と成果

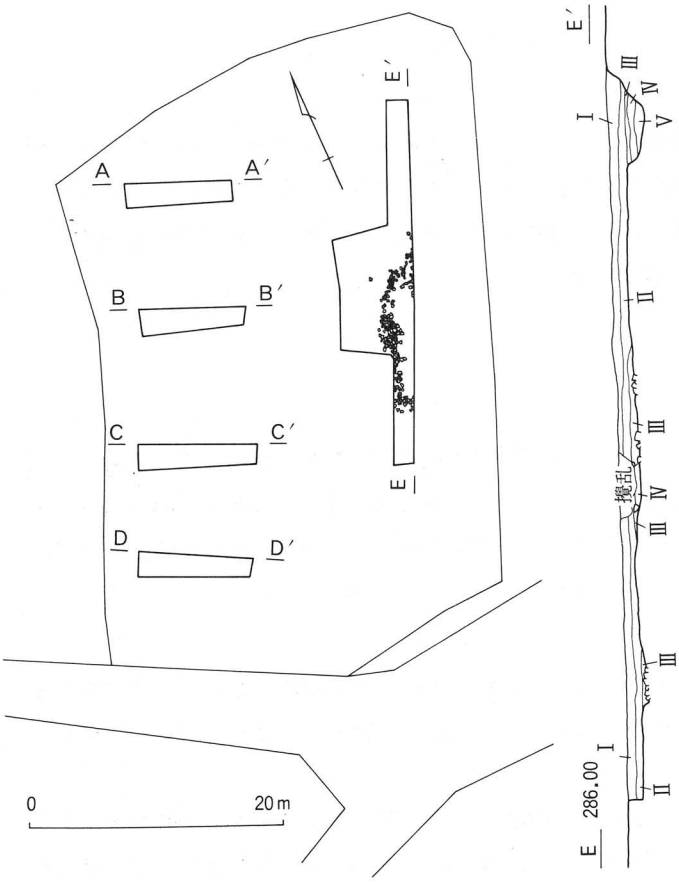
建物建設用地約60㎡は全面的に調査を実施し、そこから北及び南方向にトレンチを延長した。また用地西半部には２×９ｍのトレンチ４本を東西方向に設定した。調査は重機によって表土を排土し、後人力によって精査しつつ掘り下げた。

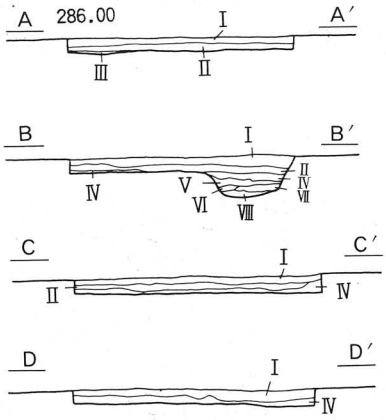
建物建設用地に重なる様に、集石遺構が検出された。規模は、南北８ｍで、東西は４ｍを残すが東半部はかなり壊され石の集まりが散漫になっていた。西側縁は緩く孤を描きよく残っている。石は基本Ⅳ層の上部に並べられ、人頭大からやや小振りの大きさである。比較的平面的に並べられ、積重ねられた状態の部分はごくわずかであった。石のさらに上部には黒色土を主体とする土が覆っており、後世に削平された可能性は少ない。出土遺物は少なかったが、ほとんどは石の間に落ちこんだ状態で検出された。断片化が進み図化しえなかったが、古墳時代後半期の遺物である。

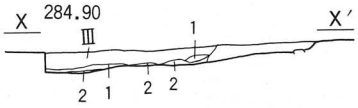
敷地西半部に設定したトレンチからは、遺構・遺物とも確認されなかった。

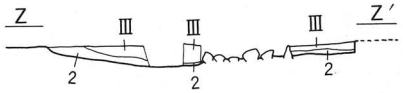


第12図　切付遺跡周辺地形図〔１／5000〕









Ⅰ層：耕　作　土
Ⅱ層：茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、指頭大～拳大の礫を含む）
Ⅲ層：黒褐色土層（粘性強、しまり有、粒子１㎜程の礫を含む）
Ⅳ層：黄褐色土層（粘性やや強、しまり有、粒子密、拳大の礫を含む）
Ⅴ層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、礫を含む）
Ⅳ層：茶褐色砂層
Ⅶ層：茶褐色砂礫層（指頭大の礫主体、拳大の礫を含む）
Ⅷ層：礫　　層　　（人頭大の礫主体）

１層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、１㎜程の礫を多量、ロームブロックを含む）
２層：明黄褐色土層（粘性やや強、しまり有、１㎜程の礫・黒色土粒を少量含む）

第13図　切付遺跡遺構全体図及びセクション図〔１／600，１／300，１／120〕

第6節　パチンコ出店(ジャンボ)に伴う大新井C遺跡等の試掘調査

1）調査に至る経緯

㈲マルニシは、櫛形町桃園地内字大新居地内の通称廃軌道沿いにパチンコ店の出店を計画した。敷地東北隅が大新井C遺跡にかかっており、開発面積も約5000㎡に及んでいた。そのため櫛形町教育委員会では文化財保護のため、遺跡該当部分及び建物建築部分については試掘調査が必要であると判断し、㈲マルニシと協議に入った。その結果㈲マルニシの理解を得て試掘調査を実施することとなった。

調査期間　　平成4年4月23日～同月27日

調査面積　　約94㎡

2）遺跡の位置と環境

遺跡は櫛形町桃園字大新居に所在する。

櫛形町東半部は櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地であるが、町内北半部は御勅使川の造る扇状地と一体となった大きな複合扇状地となっている。遺跡の所在する桃園地区は、この複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では従来遺跡の確認はなされていなかった。しかし、近年櫛形町内遺跡分布調査[*12]　甲西バイパスに伴う七ツ打遺跡の調査[*13]等の調査が実施され、中・近世の遺跡の存在が確認されつつある。

3）調査の経緯と成果

調査方法はトレンチ法によって実施し、原則として耕作土を重機によって排土し、後人力によって掘り下げつつ遺構・遺物の発見に努めた。試掘は大新井C遺跡内では磁北に従ってトレンチを設定したが、果樹が植えられていたこともあり、適宜移動した。またそのため重機も使用できず、すべて人力で排土した。建物建設用地内では建物長軸に沿って2本のトレンチを設定し重機によって排土した。試掘面積は、前者では54㎡、後者では40㎡である。建物建設用地内北半部のFトレンチでは地表下30cmで厚さ10cm程の黒色土層があったが、遺構、遺物は確認できず、同南半部のGトレンチではこの層は検出できなかった。両トレンチとも地表下60cm以下は礫、砂礫層が互層となっている。大新井C遺跡内でも地表下60cm程で砂礫層にあたる。ここでは耕作土を除き、土層堆積が錯綜しており、扇状地内の土砂堆積の様相を示しているものといえる。遺構も小破片をわずかる得られたのみである。

第7節　ケーヨーホームセンター建設用地内遺跡確認調査

1）調査に至る経緯

㈱ケーヨーでは、櫛形町桃園字八反畑において櫛形町ショッピングセンターの建設を計画し、平成4年度の出店をめざしていた。該当地は埋蔵文化財包蔵地からは外れていたが、周辺に50mほどに3ヶ所の遺跡が存在していた。そのため櫛形町教育委員会では、㈱ケーヨーと協議を求めたうえ、建物建設用地内については試掘調査を実施する事とした。

調査期間　　平成4年6月29日～7月5日

調査面積　　約300㎡

2）遺跡の位置と環境

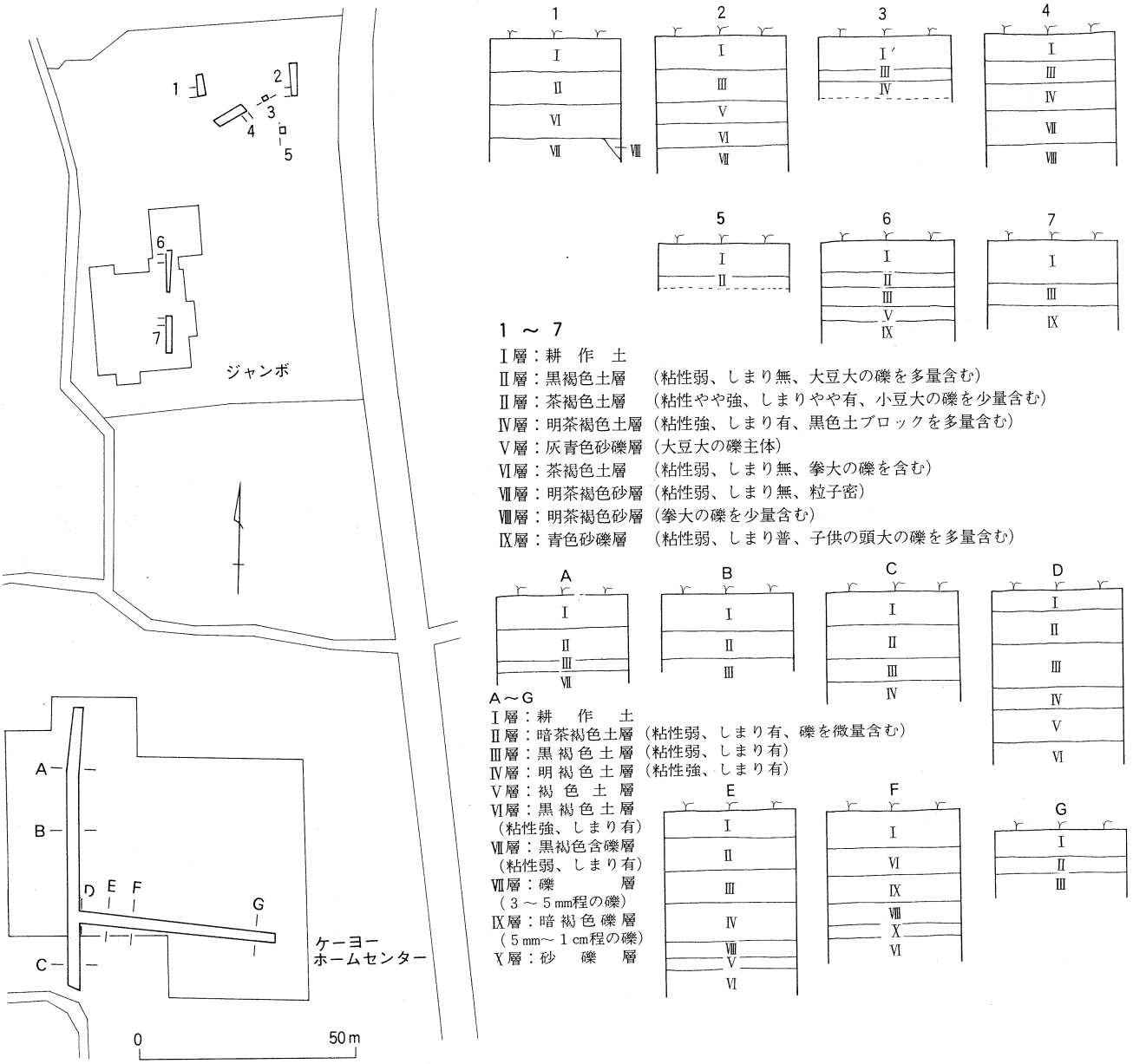
遺跡は櫛形町桃園字八反畑に所在する。

この建設予定地は、前節で説明したパチンコ店（ジャンボ）に南隣しており、御勅使川の造る複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では従来遺跡の確認はなされていなかった。しかし近年の調査に伴って、中・近世の遺跡が期待されることは前節で述べた通りである。

3）調査の経緯と成果

試掘調査は、建物建設地内にT字形に2本のトレンチを設定して行った。トレンチは南北に3×60m、東西に3×45mの2本である。重機によって表土を排土したが第3層が黒褐色土に変化したため、後人力によって精査しつつ掘り下げた。

該地は扇状地上であり、先に試掘を実施したパチンコ店出店予定地等の例から礫層が厚く堆積しているものと予想していた。しかし、ここでは黒褐色土層（3・6・7層）間に褐色ローム質土が挟まれた状態で堆積し、礫、砂礫層は東西トレンチの東端部でようやく確認された。基本土層が黒褐色土層や褐色ローム質土層であったため、遺構、遺物の発見に期待がもたれたが1点の遺物も出土しなかったため、トレンチの拡張等は断念した。



第14図　大新井C遺跡及びケーヨーホームセンター建設用地内トレンチ配置図及び土層概念図〔1／1500・1／60〕

第15図　大新井Ｃ、往還東Ａ・Ｂ遺跡周辺地形図〔１／6000〕

第８節　農道４号支線２号線開設に伴う試掘調査

１）調査に至る経緯

櫛形町では、平成４年度に町内桃園地内において農道４号支線２号線の開設を計画した。同線は町内桃園地区を南北に縦断する様に敷設されるもので、総延長は約850ｍに及ぶ。路線内、及び周辺には５ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されていた。そのため櫛形町教育委員会と農林振興課とは、埋蔵文化財の保護にむけて協議を行い遺跡内及び周辺の試掘調査を実施することとなった。

調査期間　　平成４年３月

調査面積　　約120㎡

２）遺跡の位置と環境

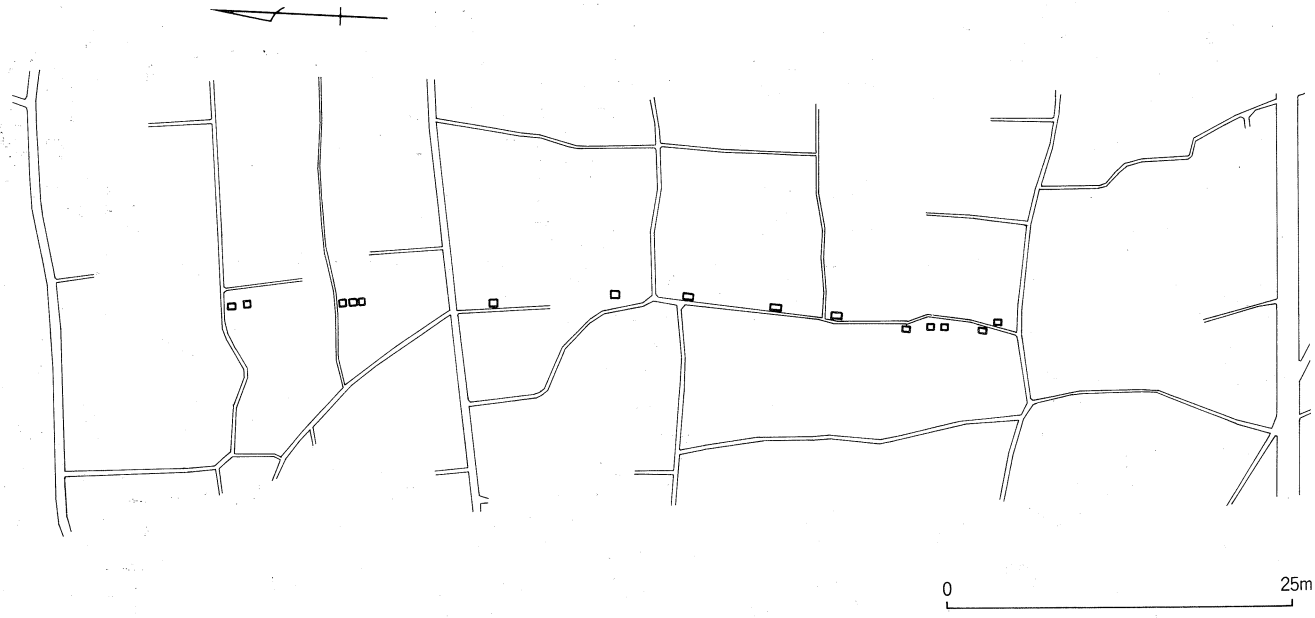
農道敷設予定地は櫛形町桃園にあり、南から八反田、大新居、東原の各字にまたがっている。

櫛形町は東半部は櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地であるが、町内北半部は御勅使川の造る扇状地と一体となった大きな複合扇状地となっている。遺跡の所在する桃園地区はこの複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では従来遺跡の確認はなされていなかった。しかし、近年の開発や調査の進展に伴い、中・近世の遺物を主体とする埋蔵文化財包蔵地が確認されている。

３）調査の経緯と成果

今回の路線内及び周辺で確認されていた埋蔵文化財包蔵地は５ヶ所であった。その５ヶ所を中心に、路線内に２×２ｍ、２×４ｍのグリッド15ヶ所を設定し、全て人力で掘削した。八反田、大新居では地表下50～70cm程で砂礫層にあたり、以下礫層、砂層等が互層をなして厚く堆積していた。一番北の東原では砂礫層は確認しえず、黒褐色土層及び褐色ローム質土が確認された。そのためトレンチを拡張し、また地表下２ｍ近くまで掘り下げた。

しかし遺構、遺物は全く確認しえなかった。



第16図　農道４号支線２号線グリッド配置図〔１／5500〕

第９節　ヤオハン建設用地内（往還東Ａ・Ｂ遺跡）試掘調査

１）調査に至る経緯

㈱ヤオハンジャパンでは、櫛形町小笠原及び十五所地内において大規模ショッピングセンター櫛形店の出店を計画した。ショッピングセンター予定地北西隅には往還東Ａ・Ｂ遺跡が半分ほどかかるように存在していた。

また該当地は83,000㎡を上回る広大な面積であるため、未確認の埋蔵文化財包蔵地の存在も杞憂されたため櫛形町教育委員会では、㈱ヤオハンジャパンと埋蔵文化財保護のため協議を行った。その結果、建物建設地内を中心として試掘調査を実施する事とした。

調査期間　　平成４年12月10日～同月25日

調査面積　　約750㎡

２）遺跡の位置と環境

ショッピングセンター予定地は櫛形町小笠原往還東及び雨久保から同十五所西原にかけて所在する。

櫛形町は東半部は櫛形山から流れ出た河川の形成した扇状地であるが、町内北半部は御勅使川の造る扇状地と一体となった大きな複合扇状地となっている。ショッピングセンター予定地はこの大きな複合扇状地の扇端部にあたる。この扇状地上では従来遺跡の確認はなされていなかった。しかし、近年櫛形町内遺跡分布調査[*15]甲西バイパスに伴う七ツ打遺跡の調査[*16]等が実施され、中・近世の遺跡の存在が確認されつつある。また、ここから東へ700ｍ程には弥生時代の方形周溝墓も発見され、注目を集めつつある地域である。

３）調査の経緯と成果

この事業地は、83,000㎡と広大な面積であったが実際に埋蔵文化財包蔵地と認識されていたのは、その北西隅約2000㎡であった。また第１次の建物建設用地も、事業地の西半部に偏っていた。そのため既確認の埋蔵文化財包蔵地内と建物敷地内を中心として２ｍ幅のトレンチを地軸方位に従って設定した。さらに事業地東半部では基本土層の確認もかねて４×４ｍのグリッド12ヶ所を設定した。

調査は一部重機を使用して排土したが、ほとんどは人力で行った。ほとんどのグリッドでは30～40cmの耕作土の下位は砂礫層となり、重機によって２～３ｍ程深掘を行った範囲内（Ｇ１・２・31・39）では全て砂礫層であった。しかし北西隅の往還東Ｂ遺跡にあたる部分（Ｇ11～18）では、耕作土下は黒褐色土が堆積していた。しかし、遺構は発見できず、遺物も近世陶器類が主体で細片化していた。また出土層位は、すべて耕作土中であった。

４）ま　と　め

今回迄の桃園地内における調査では遺構・遺物は全く発見できなかった。しかし、扇状地内の基本土層のあり方については新たな所見がえられたものといえる。扇状地にあっては、耕作土下部は基本的には礫・砂礫層が互層をなして厚く堆積している。しかし、２次堆積と考えられるロームが間層として存在する部分があり、また、黒褐色土層や褐色ローム質土層が堆積しているところもある。これまでの調査では、農道４号支線２号線内東原地区から、パチンコジャンボ南西隅部・ケーヨーホームセンター建設用地北半部を通り、往還東Ａ遺跡（ヤオハン敷地北端部）で止まっているのが観察され、扇状地内で等高線にほぼ直交して筋状にみとめられる傾向にある。[*14]扇状地における微地形の観察、現集落との関係も含め今後参考に値するものといえる。

1
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層（礫混入）
Ⅲ層：茶褐色砂質土層
Ⅳ層：礫層
Ⅴ層：黄褐色土層
Ⅵ層：黒褐色土層
Ⅶ層：礫層

2
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土層
Ⅲ層：黄褐色砂質土層
Ⅳ層：礫層
Ⅴ層：砂礫土層

3
1層：耕作土
Ⅱ層：
Ⅲ層：
Ⅳ層：

4
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫層
Ⅲ層：細礫層

5
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
Ⅲ層：明褐色砂質土層
Ⅳ層：茶褐色土層
Ⅴ層：礫　層

6
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層茶褐色土層
（礫混入）
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：茶褐色砂質土

7
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：茶褐色砂質土

8
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
（礫混入）
Ⅲ層：茶褐色土層
Ⅳ層：黒褐色土層
Ⅴ層：礫　層

9
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
（礫混入）
Ⅱ層：礫　層

10
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：

11
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土層
Ⅲ層：明褐色土層
Ⅳ層：黒褐色土層
（礫多量混入）

12
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土土
Ⅲ層：明褐色砂質土層
Ⅳ層：黒褐色土層
（礫多量混入）

13
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：茶褐色含礫層
Ⅳ層：細礫層
Ⅴ層：茶褐色土層（礫礫入）
Ⅵ層：茶褐色土層（砂混入）

14
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：小礫層
Ⅳ層：細礫層
Ⅴ層：茶褐色土層（部分的に礫混入）
Ⅵ層：茶褐色土層（砂混入）
Ⅶ層：礫　層（黒褐色土混入）

15
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土層
Ⅲ層：茶褐色土層
（部分的に礫混入）
Ⅳ層：茶褐色砂質土層
Ⅴ層：礫　層

16
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土層
Ⅲ層：礫　層

17
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土層
Ⅲ層：明褐色土
Ⅲ層：明褐色砂質土層
Ⅳ層：礫　層

18
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色含礫層
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：黒褐色含礫層
Ⅴ層：礫　層
Ⅵ層：茶褐色砂質土層

19
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色含礫土層
Ⅲ層：茶褐色土層
（礫混入）
Ⅳ層：茶褐色砂質土層
Ⅴ層：礫　層

20
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：含礫層
Ⅳ層：礫　層
Ⅴ層：含礫層
Ⅵ層：茶褐色土層
Ⅶ層：含礫層
Ⅷ層：含礫層（礫大）
Ⅸ層：茶褐色砂質土層

21
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：茶褐色含礫層
Ⅳ層：茶褐色砂質土層

22
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層（礫混入）
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：茶褐色土層（礫混入）
Ⅴ層：茶褐色土層（礫・砂混入）
Ⅵ層：茶褐色土層（細礫混入）
Ⅶ層：茶褐色砂質土層

23
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
（礫多量混入）
Ⅲ層：茶褐色砂質土層
Ⅳ層：礫　層
Ⅴ層：茶褐色砂質土層

24
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：茶褐色土層
Ⅴ層：礫　層
Ⅵ層：茶褐色砂質土層
Ⅶ層：礫　層

25
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：明褐色土層
Ⅲ層：黒褐色土層
Ⅳ層：明褐色土層
Ⅴ層：明褐色含礫層

26
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：茶褐色砂質土層
Ⅳ層：黒褐色含礫層
Ⅴ層：黒褐色含礫層

27
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色含礫層
Ⅲ層：砂質土層
Ⅳ層：茶褐色土層
Ⅴ層：黒褐色含礫層
Ⅵ層：茶褐色含礫層

28
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層（礫多量）
Ⅲ層：茶褐色砂質土層
Ⅳ層：砂礫土層
Ⅴ層：茶褐色砂質土層
Ⅵ層：礫　層
Ⅶ層：明褐色砂質土層

29
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：砂質土層
Ⅳ層：礫　層
Ⅴ層：茶褐色含礫層
Ⅵ層：茶褐色土層
Ⅶ層：砂質土層
Ⅷ層：明褐色砂質土層

30
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：褐色砂質土層

31
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色含礫層
Ⅲ層：黒褐色含礫層
Ⅳ層：明褐色砂質土層
Ⅴ層：砂礫土層

32
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色含礫層
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：明褐色砂質土層

33
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：砂礫土層

34
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒褐色土層
Ⅲ層：茶褐色含礫層
Ⅳ層：礫　層
Ⅴ層：砂礫土層

35
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
（礫多量混入）
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：砂質土層

36
Ⅰ層耕作土
Ⅱ層：茶褐色含礫層
Ⅲ層：黒褐色土層
Ⅳ層：礫　層
Ⅴ層：砂　層

37
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色土層
（礫少量混入）
Ⅲ層：黒褐色土層
Ⅳ層：
Ⅴ層：黒褐色土層

38
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：茶褐色土層
（礫多量混入）
Ⅳ層：砂礫土層

39
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：茶褐色含礫層
Ⅲ層：礫　層
Ⅳ層：砂礫土層

40
Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：礫　層
Ⅲ層：砂礫土層
Ⅳ層：礫　層
Ⅴ層：砂礫土層
Ⅵ層：明褐色砂質土層

第17図　ヤオハン建設用地内グリッド配置図及び土層概念図〔１／3000，１／60〕

第10節　宝珠寺収蔵庫建設用地（宝珠寺遺跡）の発掘調査

1）調査に至る経緯

（宗）宝珠寺に所蔵する「大日如来及四波羅蜜菩薩坐像」は平成３年度に国の重要文化財の指定を受けた。そこで（宗）宝珠寺では、仏像の永久的な保存策として平成５・６年度に国、県、町の補助をうけ重要文化財の収蔵庫の建設を行うこととした。

ところで同寺一帯（西側）は、宝珠寺西遺跡として周知され、また境内には宝珠寺古墳が存在したとも伝えられてきた。さらに、同寺に関わる堂宇等の遺構が埋没していることも想定されたため、収蔵庫建設に先だって町教育委員会に依頼し建設用地（約55㎡）内の発掘調査を実施することとした。

調査期間　　平成６年３月15日～同月25日

調査面積　　約85㎡

2）遺跡の位置と環境

遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町山寺950に位置する。櫛形町の中心部は櫛形山塊から流れ出た河川による扇状地となっている。本遺跡（宝珠寺）は、櫛形町の中心部である小笠原から西へ1.5㎞ほど進んだ扇状地上に存在する。

3）調査の経過

調査は重機による表土の排土から開始した。掘削が北西隅に及んだ時点で表土（バラス層）下からかなりしまった層を確認したため、部分的に人力による排土に切り替え遺構確認のため精査を行った。しかしこの面（後にのべる版築面）は発掘区北辺から１ｍ程遺存するのみで、また北西隅は水道工事等のためすでに攪乱を受けていた。そのため、その他の部分は約50～60㎝の深さまで再度重機によって排土し、後人力によって80㎝ほどまで掘り進めつつ精査した。なお南東隅は既存建物のコークリート基礎が、北西隅も墓への登り口のためのコンクリートがうたれており、土地の改変がかなり進んでいた。

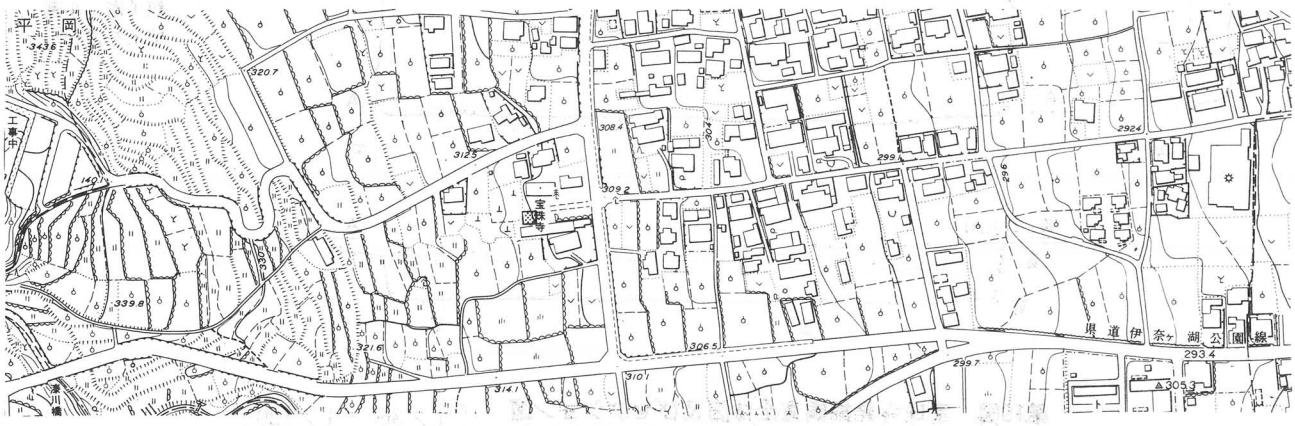
4）調査の結果

①　確認した遺構

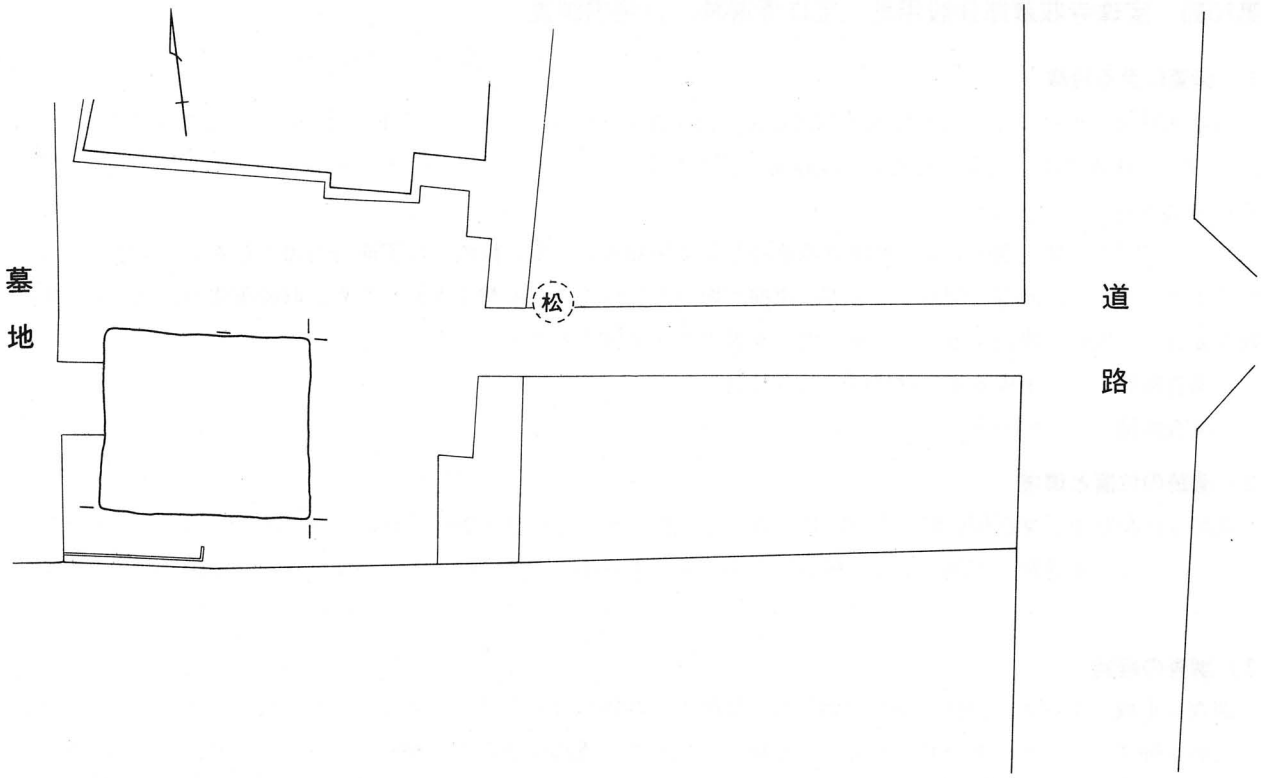
今回の調査で唯一確認した遺構は版築面であった。平面的には発掘区の北壁に沿って長さ6ｍ、幅1～1.5ｍである。その他の部分では検出できなかったが、これは本来なかったものか、後世の土地の改変により失われたものか判断できなかった。この版築面は厚さ20㎝を測り、上層はローム質の黄褐色土、下層は微細な砂利を含んだ黒褐色土であった。この黒褐色土下位にも厚さ20㎝の明茶褐色土が認められ版築面の構築前に掘込まれたものである可能性が高い。この面から遺物等はまったく見いだされず、構築された時期に付いては明らかにできなかった。

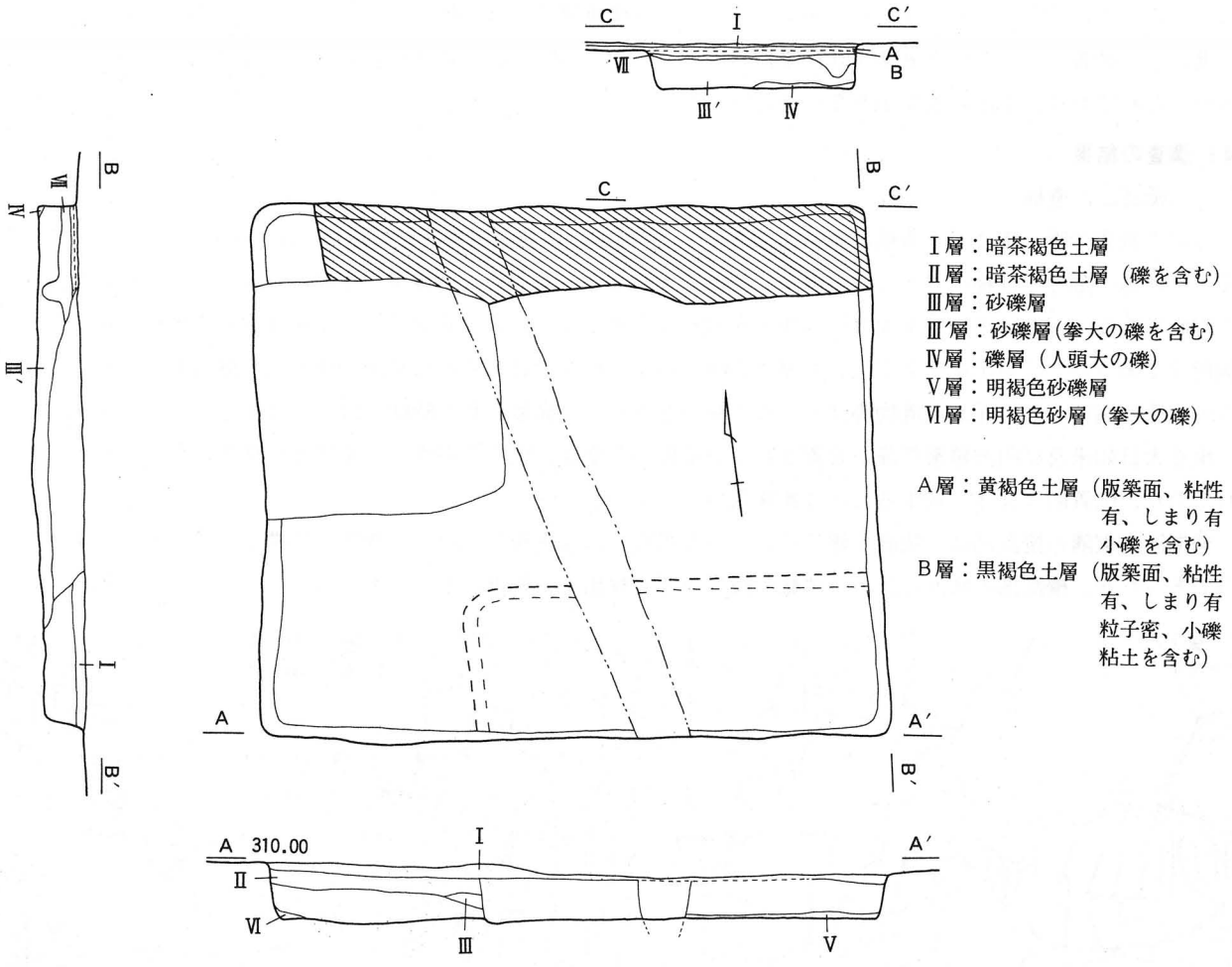
現在大日如来及び四波羅蜜菩薩が安置されている毘沙門堂は、現在の場所より南側から移されたと云い伝えられており、位置的にほぼ一致することは興味深い。

発掘区南東隅の攪乱部は、物置が建てられていた場所とほぼ重複していた。物置の基礎としてはかなり深いものであったが、攪乱部の底からはガラス瓶の破片なども検出され最近のものであろう。



第18図　宝珠寺周辺地形図　〔１／5000〕





Ⅰ層：暗茶褐色土層
Ⅱ層：暗茶褐色土層（礫を含む）
Ⅲ層：砂礫層
Ⅲ′層：砂礫層（拳大の礫を含む）
Ⅳ層：礫層（人頭大の礫）
Ⅴ層：明褐色砂礫層
Ⅵ層：明褐色砂層（拳大の礫）

A層：黄褐色土層（版築面、粘性有、しまり有小礫を含む）
B層：黒褐色土層（版築面、粘性有、しまり有粒子密、小礫粘土を含む）

第19図　宝珠寺発掘調査全体図及びセクション図　〔1／360・1／120〕

引用・参考文献

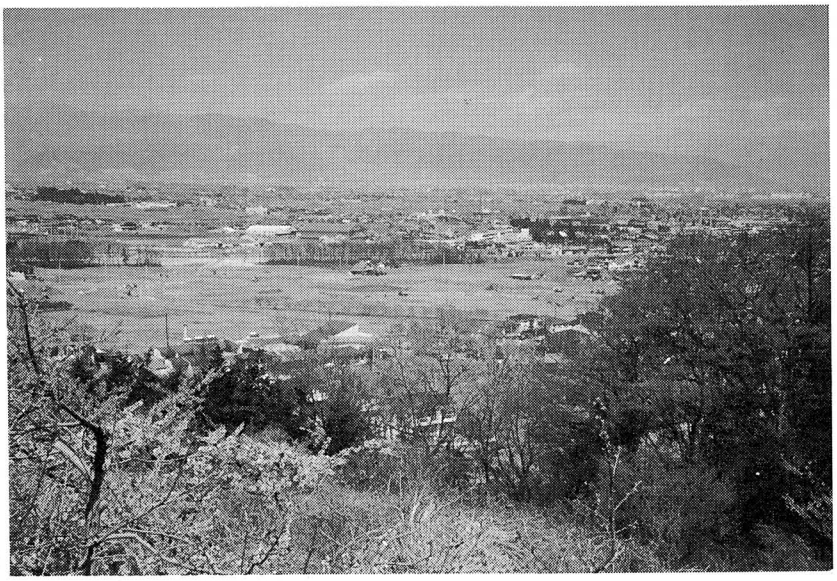
＊1　櫛形町教育委員会　1990　櫛形町文化財調査報告No８　『町内遺跡詳細分布調査報告』
＊2　櫛形町教育委員会　1989　櫛形町文化財調査報告No９　『大畑遺跡』
＊3　雄 山 閣　昭和43　大日本地誌大系　『甲斐国志』
　4　櫛形町誌刊行委員会　昭和47　『櫛形町誌』
＊4　小笠原長清公資料検討委員会　平成３　『小笠原長清公資料集』
＊5　櫛形町教育委員会　1993　櫛形町文化財調査報告No10　『柿平土地区画整理事業地内試掘調査報告』
＊6　山梨県埋蔵文化財センター　1994　「村前東Ａ遺跡について」　村前東Ａ遺跡現地説明会資料
　　山梨県教育委員会　1994　山梨県埋蔵文化財センター調査報告86　『大師東丹保遺跡』
＊7　若草町誌編纂委員会　平成２　『若草町誌』
　　山梨県立巨摩高等学校　昭和51　『櫛形山の自然』
＊8　注１に同
＊9　注２に同　　本書附章　第３節
＊10　注２に同
＊11　櫛形町教育委員会　1995　櫛形町文化財調査報告No12　『鋳物師屋遺跡』
＊12　注１に同
＊13　山梨県教育委員会　1991　山梨県埋蔵文化財センター調査報告60　『七ツ打Ｃ遺跡発掘調査報告書』
＊14　『櫛形山の自然』（注７文献）でも県立巨摩高校校庭における扇状地内の暗褐色ハードローム質粘土の存在に言及しており、遺跡立地、歴史的土地利用の上からも再検討の価値があろう。
＊15　注１に同
＊16　山梨県教育委員会　1991　山梨県埋蔵文化財センター調査報告60　『七ツ打Ｃ遺跡発掘調査報告書』

報 告 書 抄 録

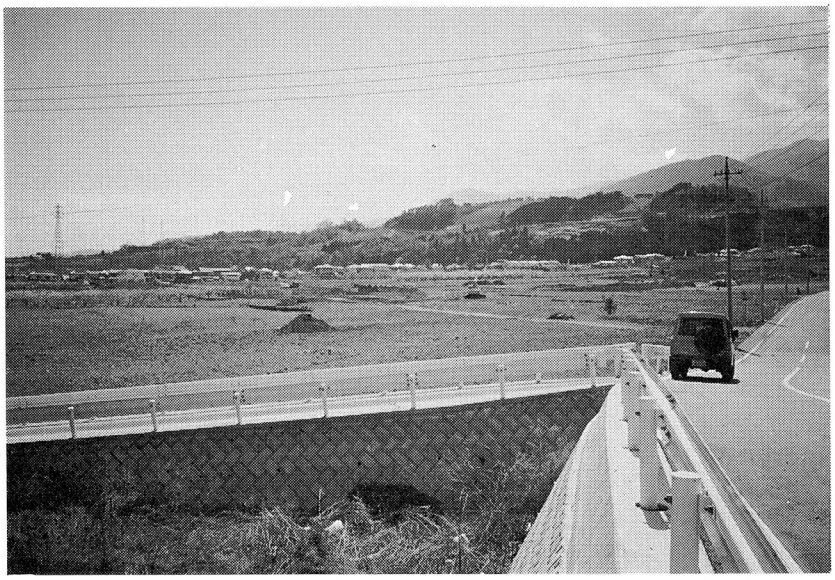
ふりがな	かきだいらびーいせき		
書　　名	柿平Ｂ遺跡		
副 書 名	櫛形町柿平土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	櫛形町文化財調査報告	シリーズ番号	No　13
編著者名	清　水　　博		
発 行 者	櫛形町教育委員会		
編集機関	櫛形町教育委員会		
所 在 地	〒400－03　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1　℡0552-82-0108		
発行年月日	１９９５年　３月３０日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
柿平（かきだいら）Ｂ遺跡	山梨県（やまなしけん）中巨摩郡（なかこまぐん） 櫛形町（くしがたちょう）小笠原字柿平（おがさはらあざかきだいら）	193909		35 度 36 分 35 秒	138度 22分 38秒	19940420 ～ 19941107	1,800	区画整理事業（櫛形町柿平地区）に伴う事前調査

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柿平（かきだいら）Ｂ遺跡		近代初頭		土器、陶器	粘土採掘壙

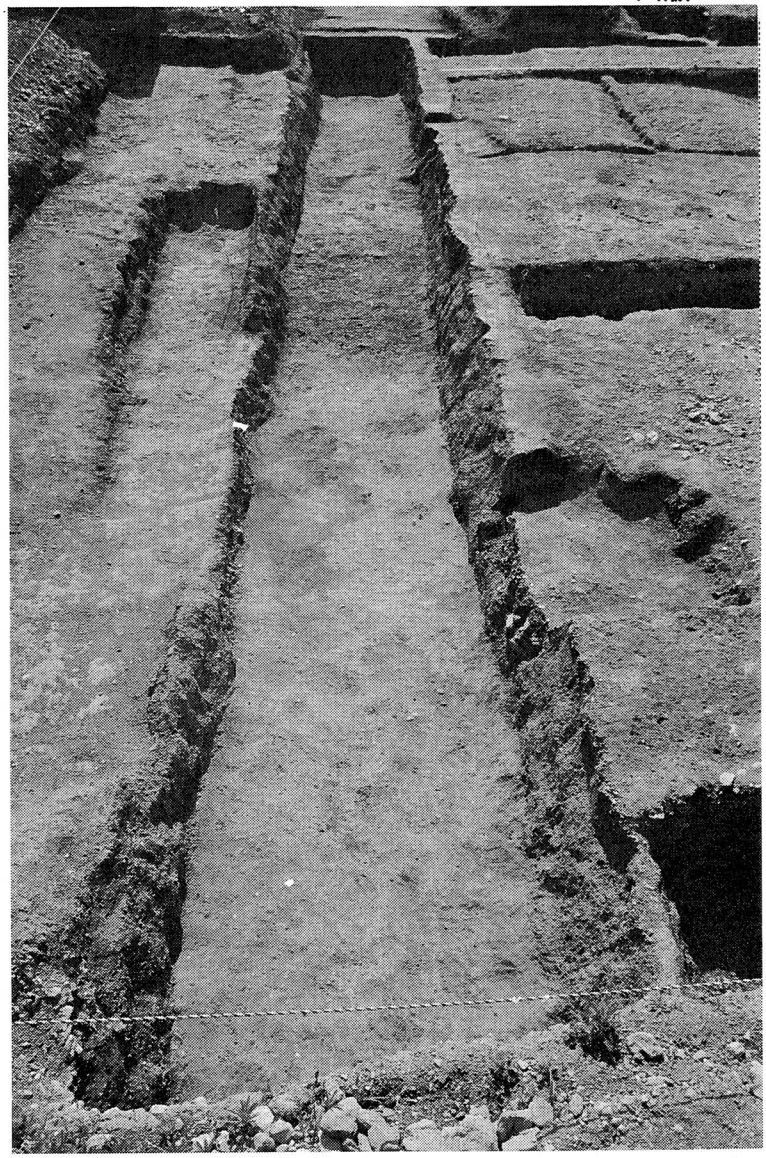


(1) 柿平地区土地区画整理事業全景

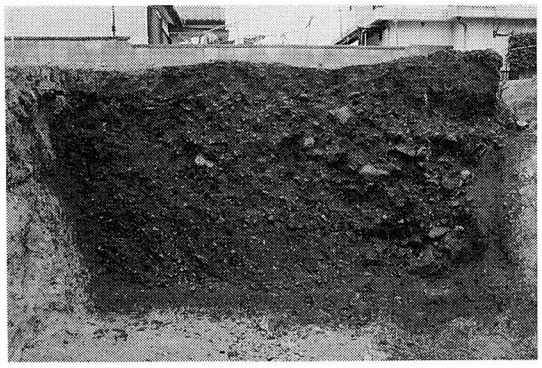


(2) 柿平B遺跡遠景

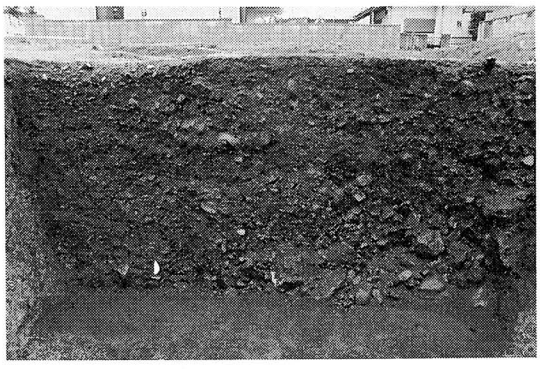
(3) 柿平B遺跡全景



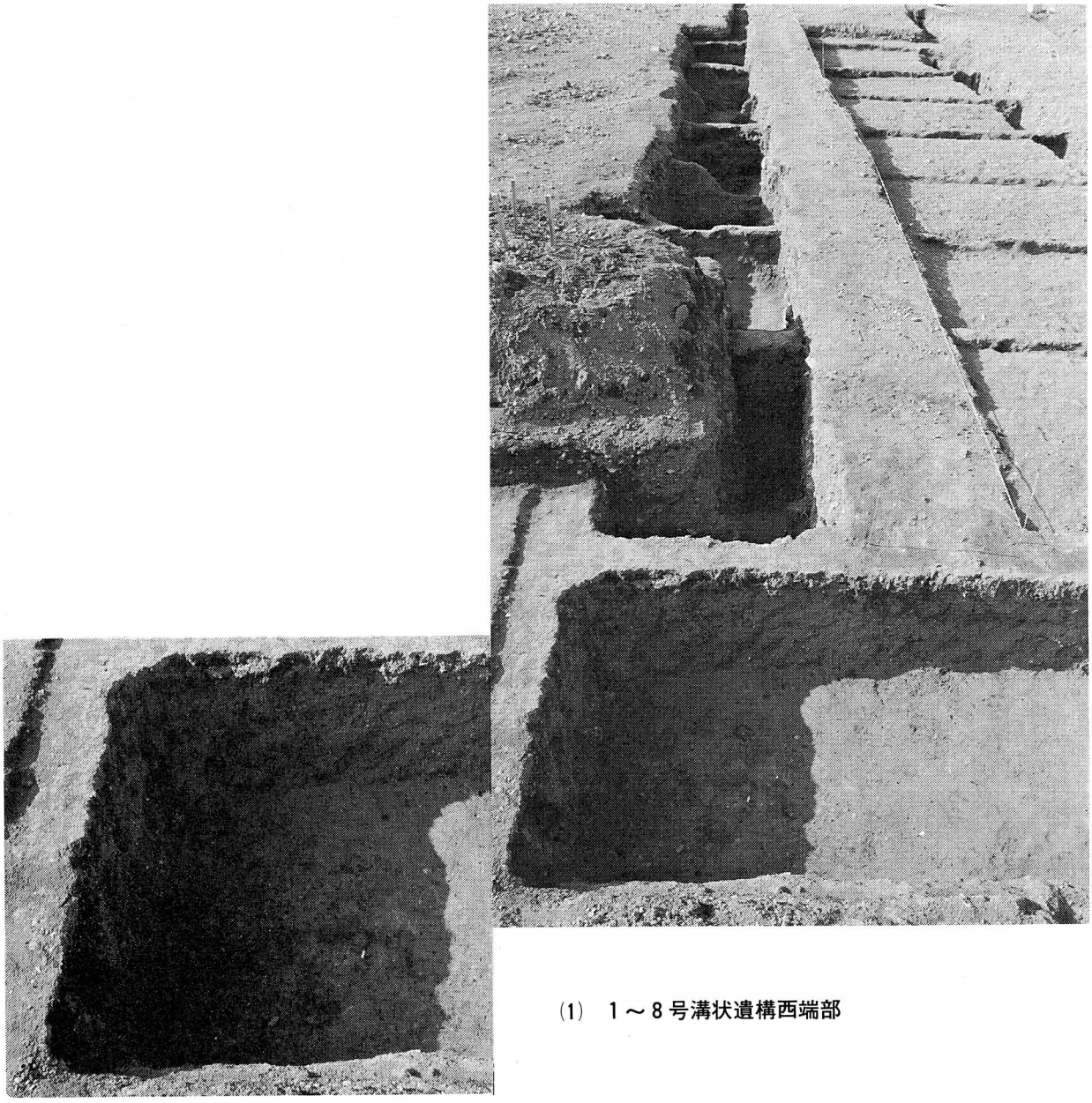
(1)　1号溝状遺構



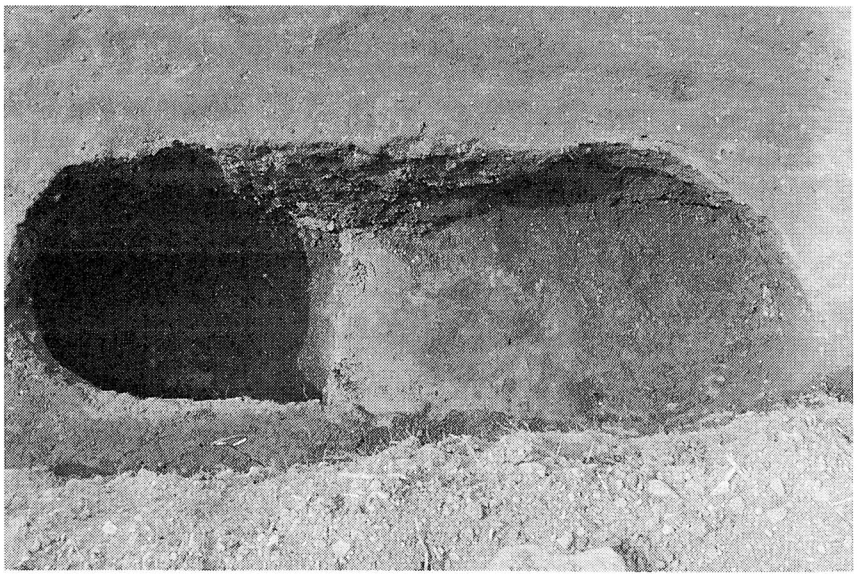
(2)　1号溝状遺構セクション



(3)　1号溝状セクション

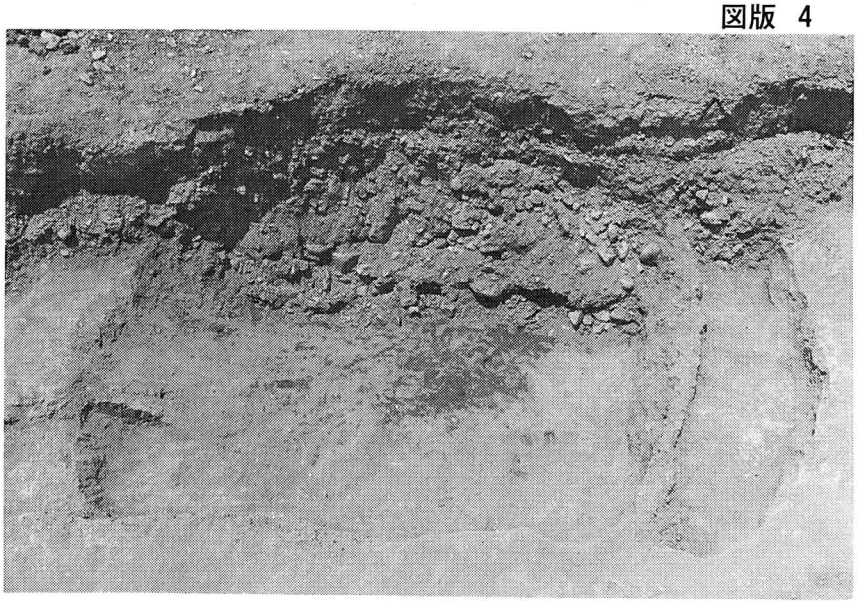


(1)　1～8号溝状遺構西端部

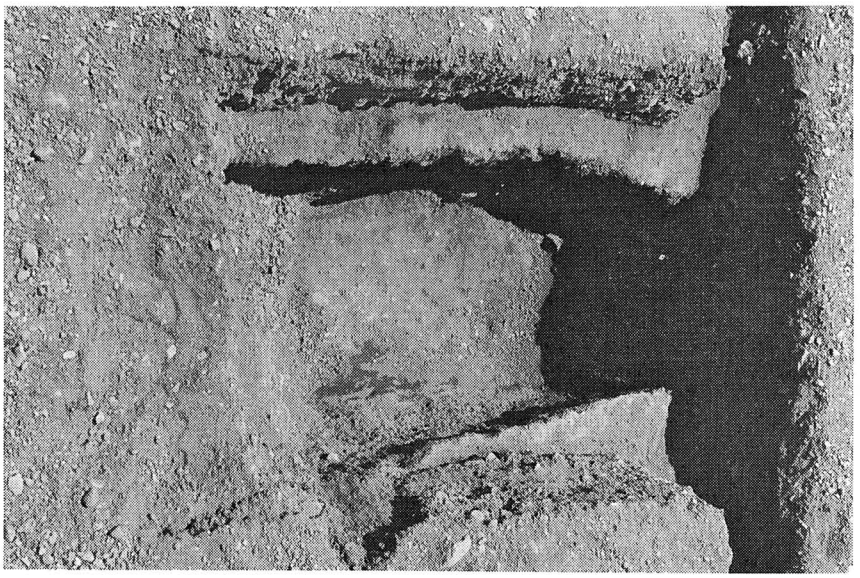


(2)　1号土壙

(1) 2号土壙



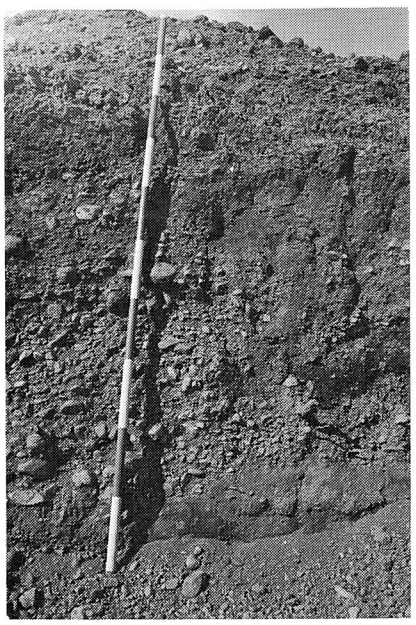
(2) 9号溝



(3)(4)試掘トレンチ
土層断面

(3)

(4)



櫛形町文化財調査報告 No－13

柿平B遺跡

山梨県中巨摩郡櫛形町柿平B遺跡他発掘調査報告書
1995年　3月20日　印刷
1995年　3月31日　発行
編集・発行　櫛形町教育委員会
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1
印　刷　野中印刷
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原